

この素晴らしいヒロインに祝福を

luck

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語はとある男がヒロインとなりカズマ達と行動を共にする物語である。

「はあ、もう帰りたい。」

「いや、もう少しいてくれよ・・・」

*タグに性転換・TS・精神的BLなどがあります。苦手な方はブラウザバックを推奨します

*T w i t t e r 始めました！「l u c k @ 雀士 になりたい人」でやってます！投稿した際にT w i t t e r の方でもお知らせしますのでお気軽にフォローしてください！

目次

番外編

カズマさん糖分摂取のお時間です

1

閑話：このヒロインとカズマの過去に

祝福を

7

第1章

プロローグ

14

この職業選択に驚きを！

22

このヒロインに初戦闘を

26

このキャベツの群れに捕獲者を

30

このリッチーに優しさを

35

このヒロインに高額報酬を！ | 40

このヒロインに高難易度クエストを

45

この首なし騎士にヒロインの恐怖を

54

この神器に祝福を

65

この神様？からの説明に祝福を

82

第二章

この素晴らしい報酬に祝福を

86

この二度目の死に絶望を

91

その時カズマは・・・

101

このアクセルの街に大襲撃を

105

この（カズマとヒロインが）最強のパ ティーに祝福を	118
この機動要塞の調査（？）に祝福を	
えつちゃん side	123
この機動要塞の調査（？）に祝福を	カ
ズマ side	128
この領主に肅正を	1
この領主に肅正を	2
この領主に肅清を！	3
この領主に肅清を	4
この領主に肅清を	5
この領主に肅清を	6
	155
	150
	146
	142
	138
	134

番外編

カズマさん糖分摂取のお時間です

カズマ side

「カズマ。こつちです次はこつちにいきましよう」

「わかったわかった。だからそんな引つ張るな」

いきなりだが、何故こんなことになってしまったのかを説明しよう。

こんなことってなんだって？それはえっちゃんに連れられて甘味巡りをしているということさ！

く回想く

1時間ほど前、机に顔を付けて突っ伏している人物を見つけた

「……………何してんの？」

「糖分が足りません。カズマさん糖分を要求します。」

クルリ！という効果音が付きそうなほどの速さで顔だけをこちらに向けてそう言ったのはみんなの天使（冒険者間ではこのことは周知の事実である）ことえっちゃんだ。

「糖分？甘味ってことか？」

「そうです。具体的にはあんまんなどが食べたいです」

「てか、なんで糖分がないだけでそんなことになってんだ？お前は逆に前は甘いのが苦手だったろ？」

「この体になつて甘いものがとても好きになったのです。そして、甘いものを取らないと動けないのです。」

「そうか。じゃあ、これ食ってみるか？」

そう言い出したのは砂糖を使って作ってみた飴玉だ。この世界に来て飴玉を見ていなかったのちよつとだけ作ろうと思ったものだ。

「！いただきます」

「はや!！」

目で追いかけることが出来ないほどの速さなんだけど!?そんなに甘いものが好きなのかよ！

「んー。これ結構美味しいですね。味はくオレンジみたいですね。どこで売ってたんですか？」

「ああ、それは俺の手作りだよ。味の方は果汁でなんとかかなと思つて何となく入れて見たものだ。……そんなに美味しいならこれから定期的に作つてやろうか？」

「お願いします。お礼に何でもしますので。」

グワツ！という効果音が付きそうなほど真剣な目で俺に頼んで来た。

…そんなに好きなのか。

「ところで、アクア達は？さつきから見えないけどどこ行ったんだ？」

「なんか町で祭りがやってるらしいですよ。なのでちよつと行ってくると言っていました」

「そうか……」

「…なら俺たちも行くか！」

「何故です？」

「祭りならうまいもんがあるだろ？それにさつきなんでもするって言っただろ？だってら行くこうぜ！」

「そうですか。ならいきましようか。……あ、お祭りなら甘いものもありますね。買ってくださいね？」

コテンと首を傾けてそう言うえつちゃんに俺は。

「お、おう任せとけ」

……今のは可愛かった

く回想終了く

ということがあり、今は一緒に祭り巡りをしている。

「なあ、えつちゃん。」

「なんですか。」

「お前の邪聖剣ネクロカリバーってさ。整備とかすんの？」

「いえ？しませんよ。基本壊れたら買い換えませ。」

「え？そんな感じで大丈夫なの？」

「大丈夫です。…！カズマ。ここも甘い匂いがします。買いに行きましょう」

「って！どれだけ食うきだ！もう30分以上ずっと食い続けているじゃねえか！」

「今まで摂取出来なかった分をここで補います。」

「ああもう！ならあれに出よう！『甘いもの大食いグランプリ！』あれなら好きだけ食えるぞー！」

「いいですね。出ましょう」

え？出るの？ま、まあこれ以上金がかかるとやばいな。いくらえつちゃんが高難易度クエストをクリアできると言ってもベルディアの時みたいなのはもう見たくないしな。

「おう、じゃあ受付行ってくるぞ」

「わかりました」

つうわけで登録して今食つてるところだけど……

『おおつとお!!!謎のヒロインXオルタ選手!まだ食べるまだ食べる!!このまま会場内の甘味をすべて食べてしまえばいいような勢いだアアアア!!!』

「うぶ。も、もう無理だア」

「げん…かい」

「おかわりです」

『た、食べ続けているぞX選手!これは既に大会記録を更新しているが。どんどん増えて行くウウ!!!』

という、えっちゃんの独壇場だな。

「おーい。えっちゃん!どこまで食べる気だ?」

「…そうですね。腹八分目という言葉もありますしここまでにしましょうか。」

まだ食えるのかよ!

『しよ、勝者!謎のヒロインXオルタ選手ウウ!!!こんな大会は波乱の一幕だアアアア!!!』

「お疲れ」

「付き合っていたいただきありがとうございます」

「そんな固いこと言うなって。俺とお前の仲だろ？なんでも言えって。」

「……そんなこと言うとは勘違いしてしまいますよ？」

「ん？なんか言ったか？」

えっちゃん？がなんか言った気がしたが気のせいかな？

「いえ、飴玉の件忘れないでくださいねと言っただけです。でも、飴玉以外にもたまには食べたくなるのでレパートリーを増やしてくださいね」

「わ、わかってるよ」

まあ、これは俺とえっちゃんの日常的一幕だよ。

閑話：このヒロインとカズマの過去に祝福を

昔の話をしよう。俺とカズマがまだ中学の頃だった時の話だ。

「未井ー！学校いこーぜー！」

いやだ。なんであんなところに行かないといけないんだ。

「ごめんねーカズマくん。未井ったら不良たちに何かされちゃったみたいで、でも何をされたのか教えてくれないのよ〜。」

「そうですか。それじゃあ、上がってもいいですか？」

「いいよいいよー。さ、上がって上がって！」

「お邪魔しまーす」

あのババア。勝手にカズマをうちに入れやがった。

「おーい未井ー！」

ドンー！ドンー！ドンー！

うるせえ。どつかいけよ。

「無視すんなよー。何があつたんだよー。」

ガチャツ。

「お、出てきたなー。さ！学校n……ガシツ！……へっ？」

うるさいから勢いで部屋に連れ込んだが、何をしようとしたんだ？俺は。

「お、おい？いきなりなんだよ未井……」

「もう、学校どころか家から出たくないんだよ……」

カズマ side

「……おい。何があつたんだ？何があつたかぐらいは言ってくれねえか？」

俺が、そう言うのと未井は少しづつだが教えてくれた。

「1週間前くらいから3年の先輩たちからカツアゲされてんだ。だが、それはまだ良かったんだよ。それから3日ほどでエスカレートして言ったなとうとう昨日の昼かな？その時に全裸にされて体中を落書きして写真を撮られたんだ。」

もう、あんな奴らに会いたくないよお。」

……途中からはもう未井は泣いていた。

「未井。今日は別に学校に行かなくていい。だが、明日は行くぞ。今日中に何とかしてやる。」

「え？か、カズマ？」

「じゃな！」

俺は笑顔で未井の部屋から出ていった。

「ま、待てよカズマ！」

未井が何か言っていたが俺は知らねー

「おばさん。今日は未井を休ませてやってくれねえか？」

「わかつているわよ。さつきちよつとだけ聞こえちやってね？…カズマくん別にあなたが関わる必要のないのよ？警察に言えばいいの。」

「これは俺が片付けたいんです。見なかったこと。そして、聞かなかったことにしても
らえませんか？」

「…はあ、私が何を言っても無駄ね。わかったわ。また明日ね？」

「はい。それでは」

学校にて。

未井がカツアゲをされていたのを見たと言う生徒がいたため。直ぐに先輩の名前が
わかりちよつと、呼ばせてもらった俺は待ち合わせ場所（校舎裏）に来ていた。

「おーい。お前か？俺たちを呼んだ1年は」

「はい。俺です。すいませんね？勝手に呼ばせてもらって？」

「ほんとだぜ？まったく。礼かなんかが、欲しいなあ？お前ら！」

「おうおう」「来てもらって何も無いわけないよなー！」

「へいへーい。有るもんよこせやー！」

俺はにっこりしながらそれを見せた

「良いですよ？これを上げます。」

それは、数枚の紙だった。中には写真もある。

「な！何故これを！」

「何故って調べただけですよ？」

「なら、この写真はなんだ！どうやって撮った！」

「盗撮です☆！」

「な！」「おいおい。なんだよこれ。」「これは俺についてだ」

「ちなみにこれは全てバックアップがとってあります。消してほしい。もしくは、誰にも言つてほしくない場合はもうこれ以上、俺の幼馴染の未井に手を出すな。つてか、近づくな。いいな？」

俺は恐らくそれはそれはいい笑顔で言つたであろうセリフに不良たちは顔を青ざめ

た。

「わかった！言うことをなんでも聞く！だからそれは誰にも言わないでくれ！頼む！」

「なら、約束を守れよ？」

「わ、わかった！」

そう言つて俺はその日の学校をサボつて家に帰つた。

「おい。未井ー！学校にいこーぜー！」

「わかつたわかつた。でも、本当に大丈夫なのか？また先輩に何かされないか心配なんだが」

「大丈夫大丈夫！何かして来たら俺に言えつて！何とかしてやる！」

その言葉で安心したのかわからないが、学校への道に進んでいった。

放課後

「カズマ。何したんだ？先輩達が俺を見たら頭を下げて来たしカズマをみた瞬間に逃げた。一体何を？」

「脅しただけです」

「お、脅した？」

「そ、脅した。」

「どうやって？」

「あいつらの弱みを握って。」

「たった1日でか!？」

ドヤツ！

「ドヤ顔やめろ。殴りたくなる。」

「なんで?!俺はお前を助けたつもりなんですけど?!」

「やりすぎだろ?」

「う!今度は気をつける。」

「よろしい。……でもま、ありがとな」

「ん?なんかいったか?」

「なんも?さっさと帰ってゲームやろーぜ!新しく買ったゲームをはやくやりたいんだ

!

「ちよ!待てよ未井!置いてくなー!」

その時の未井の顔は笑って心底楽しそうでした。

ちなみに。不良達の弱みとは。

ホモ。ロリコン。ドMなどの証拠が詰まった写真や、資料を見せただけである。
てか、これらの証拠をたった数時間で集めるカズマって一体…何者？

第1章

プロローグ

わた．．．なぜ．．．

ここは．．．．．して

．んだ．．なのに

夢を見た。

とても悲しい夢だったと思う。

なぜ悲しいかというと、起きた時涙を流していたからだ。

おそらく死んだカズマの夢でも見たのだろう。

あいつが死んでもう数日が立つ。なにもやる気がしない

あいつとは幼稚園のころからの悪友だった。何をするにしても二人で悪だくみをしていた。

中学のころゴキ〇リを大量に入れた虫かごを教室において教室を混乱させたり、近くの別校の不良どもをひどい目にあわせて俺たちの名前を聞かされたたびに恐怖するようになりときりがなくらいに遊んだ。

だがまあ、いつ思い出してもあいつの死に方は面白かったがな・・・

はあ、F〇〇でもやるか。

ちなみに俺の押しキヤラは謎のヒロインXオルタだ。

あ、てか腹減ったな。飯買にいこ。

結構食ったな。

んじや、ゲームの続きでもするか。

ふわあ、寝みい。

寝よ。

んー。よく寝たな。

?ここは何処だ?いつのまにか真っ暗な空間にいるのだが。

おや?今気づいたが目の前にはとても綺麗な人がいた

「榎野^{まきの} 未井^{みい}さんですね?あなたは午前2時38分心臓発作を起こし死亡しました」

「はあ、え?死んだのか?俺が?」

「はい。」

それですがあなたにはこれから3つ選択肢があります。

ひとつは、記憶を消して赤ちゃんに転生するか。二つ目は、天国で永遠ともいえる日

向ぼっこをするか、最後は別世界に転生するか。

どれにしますか?」

「別世界というと剣や魔法のファンタジー世界ですか?」

「はい。ちなみに私はその世界で幸福の女神をやらせていただきますエリスと申します」

「・・・少し考えてみます」

「どうぞ何時間でもお考え下さい」

10分後

「決めました。異世界転生にします」

「わかりました。では、転生特典のほうを・・・」あ、それはもう決めていきます「あ、そうですか、ではどんな特典にしますか?」

「あの、僕が生前やっていたゲームのキャラに謎のヒロインXオルタというキャラがい

るのですが、容姿と能力をそのキャラにしてもらってもいいですか？」

「能力はかまいませんが、容姿もですか？」

「はい。お願いします」

「わかりました。では、あなたがいつの日か魔王を倒せると信じて。」

目を開けると目の前には広い平原がありました。

「ここが、異世界なのか？」

後ろを振り向くと大きな壁があり、門がありました。

「その君!!君もこの町に用があるのかい？」

ぼうつとしてしていると兵士の人に話しかけられました

「はいそうです。この町は何て名前なのですか」

「ここか？ここはアクセルの町。初心者冒険者が集まる場所さ」

「そうですか。ありがとうございます。」

「おう！そしてようこそ！アクセルの町へ！」

さつき途中で冒険者らしき人に道を聞いて冒険者ギルドにきました。

中はやはりいろいろな人がいてすごく楽しそうです。

「あの、冒険者登録をしたいのですが」

「はい。登録料に1000エリスかかりますが」

え。お金とるの？

ポケットの中を調べてみるが紙があるだけでお金らしきものはない。

仕方ないあとでまた来よう。

「すみませんあとでできます」

「は、はあ」

どうしましょう。お金なんてありません。こうなったらお金は体で・

その時扉が開きました。

誰かが来たのかと思ひ見てみたらそこにいたのは・・・

カズマ side

「はあ、クエストは成功したけどそれよりも被害が・・・」

「も、申し訳ありませんカズマ。毎度運んでもらってしまつて」

「いや、かまわないよ。それよりも」

「はあはあはあ、やはりいいものだな!!こう頭からがぶりとくるのは!!」

「うええええん。もうカエルはいやああああ!!」

はあ、まだめぐみんはマシなんだが、この二人が使えねえ。

どうしてうちのパーティーは変なのが集まるんだ。

んん?てかギルドに入ってからやけに視線を感じる・・・

「なあ、めぐみん」

「なんですか?」

「さつきから妙に視線を感じるんだよな」

「奇遇ですね私も感じ・・・ん?もしかして、あの少女かもしれない」

そしてめぐみんが指をさした場所には一人の少女がいた

「あの、なんか俺たちによくあるのか?」

そういうと、いきなり少女は声には出てないが泣いていた。というか涙が頬を伝っていた。

「お、おい！どうかしたか!? 腹でも痛いのか!？」

「ちよつと、カズマ何泣かせているんですか」

「だい・じょうぶです。」

「いや、だいじょうぶじゃ「それより」

「やつと、会えましたね。カズマ」

そう言つて。少女は笑つた。

これが、俺と未井の・・・いや、謎のヒロインXオルタのこの世界で初めて。そして久しぶりの邂逅だった。

この職業選択に驚きを！

えっちゃん side

「えー、つまり君は日本から転生してきた日本人だと・・・」

ハハハハ

「そして、君の日本人の時の名前は未井だと・・・」

ハハハハ

「んー、わずかにだが信じられんな・・・」

「?なぜですか?彼女はあなたの幼馴染の名前を名乗ったのでしょうか?ならば・・・」

「いや、めぐみん達にもまえにも行っただと思うが。俺がここに来る前にいたところはどうも遠くてな、それに俺の知ってる未井は男だ」

「この姿ですか?この姿はここに来る前に女神エリス様に頼んでこの姿にしてもらいました。そして、信じられないのでしたら私とカズマだけが知っていることでも話しましょうか?」

「?」

「例えば、中学二年の時に好きだった子に振られて八つ当たり気味に不良たちを泣かせ

たり」

「!?なぜそれを!」

「中学卒業の時に全てのクラスn「わかった!お前は未井だ!それを知ってるのは未井だけだ!」やっとな信じてくれましたか」

「まあ、カズマもその辺にしといてくださいよ。」

「とりあえず自己紹介しましよ!」

「あ、それよりもお金を貸してください」

「何故だ?」

「冒険者登録するお金がないんです・・・」

「そうなの・・・ちよつとカズマ!この子あなたの幼馴染なのでしよう?お金を貸してあげなさいよ!」

「いわれなくてもわかってるよ!ほらよ1000エリスだ。これで登録してこい。」

ただ、そのかわり「はい。何でもします。具体的には夜n」いいから!そこまでしなくてもいいから!てかお前わざとやってるだろ!お前のせいで周りの女性たちから軽蔑の目でみられているんだだけど!」

はは、カズマをいじるのは楽しいな。

「冗談です。あなたたちのパーティーに入らせてもらいます」

「ああ、頼んだぞ」

カズマ side

「ねえねえ、あなたどんな職業なの？」

「さあ、わかりません。たぶんバーサーク・いえ、セイバーです」

「セイバー？なんですかその職業。聞いたことがありません」

「たぶん、ソードマスターみたいなもんだろ」

こいつは、周りに打ち解けるのが早いな。だが、ホントにかわいらしくなったな。

メガネも似あっているし。ただ、よくわかんねえんだよな。

「ん？カズマ、何をそんな難しい顔をしているんだ？」

「・・・ああ、あいつがここに来た理由が分からなくてな」

「そうなのか？てつきりカズマを追いかけてきたのかと思っていたのだが」

「そんな簡単に来れるような距離じゃないんだよ」

世界が違うしな。

「そうか。・・・ん？何やら騒がしいな」

「そうだな。少し行ってみるか」

えっちゃんside

やはりというかなんというか、すごいステータスだなこれ。

「なんですか?!この数値は!運が若干低い以外は。筋力、敏捷ともに平均を上回っていますし。魔力や知能が測定不能?!こんなの見たことありませんよ!」

「うおおおおお!!新しい勇者の誕生だああああ」

「なんだなんだ?この騒ぎは」

「ちよ、ちよつと見てよカズマ!この子すごい魔力よ!こんな的神を超えているわ!」

「な!すげえじゃんか未井!...?名前が」

「そういえば名乗っていませんでした。」

クラスはバース・・じゃなくて・・クラスはセイバー。名前は謎のヒロインXオルタです。気軽にえっちゃんと呼んでください。

あ、それと、何か甘いものをくれるとありがたいのですが・・」

これが、カズマと会えた日の一日目のあるひとコマである

このヒロインに初戦闘を

カズマ side

「んじゃ、ジャイアントトードでも狩りに行くか」

未井を仲間に入れてからすぐに俺達はクエストをすることにした。

「じゃいあんとはーどとは一体なんですか？」

「デカイカエルよ」

「ああ、捕食されれば口の中のヌメヌメがn」

「おい変態クルセイダー。えつちゃんに何吹き込んでんだ」

「えつちゃん。あれのいうことはあまり気にしなくていいですよ」

「んん!!・・・やはりこのパーティーに入って正解だったな!」

「こっちはお前を入れて間違いだったよ・・・」

ほんほん

えつちゃんが頭をやさしく子供をあやすように撫でてくれる。

こいつは向こうでも基本的しやべらなかつたが、こっちに来てさらに喋らなくなつたな・・・喋っても棒読みというか平坦な口調というか。

「元氣を出してくださいカズマ。私やめぐみんながいますよ」

「そうですよカズマ。元氣を出してください」

「え？わたしもいるよ？ねえなんで無視するの？」

「おまえは論外だ」

「はあ、こんなテンションでやっていけるのか？」

えっちゃん side

カズマが終始下がったテンションのままカエル討伐に来た。

とうかかさっきのめぐみんの自己紹介はおもしろかったな・

『我が名はめぐみん!!紅魔族随一の天才にして最強!!そしていずれ世界最強の魔法使いになるもの!!』

ははは、あの子は厨二病なのかな？

「おーい！出たぞー」

ん？何が出たんだ？

「あれがジャイアントトードです。」

え？デカすぎじゃない？あんなのと戦うの？

「大丈夫です。私たちがいるので思いつきりやつちやつててください」

とりあえず武器を出さないと！

ええとたしか懐のところに・・・あ！あつた！

「おおおおいしいいい!!!早く助けてくれええー!!!」

目を向けるとカエルに追いかけているカズマが目映った

「・・・起動」

ブオン!!

「・・・しんで」

グシャ!!

「[[[「・・・は?」]]」

「あつけない」

わたしはあつけなくしんだかえるをみてそうつぶやいた

カズマ side

「お、おい。未井?」

「えっちゃんと呼んでください」

「お、おう。てか強いなおまえ」

「当たり前です。これを使って倒せない相手はほとんどいないです」

たしかに、俺とアクアが頑張っても1日2〜3匹が精々だったあのカエルを一撃で倒すとは思わなかったぜ。

「す、すごいです！なんですかその『ライト・オブ・セイバー』みたいな武器は！かつこいいです！」

「ああ！だが、一撃というのは面白くないな・・・」

「おい、なんか言ったか？」

アホセイダーがなんか言った気がするが気にしないでおこう。(すでに気にしている)

「いってない」

「そんなことより、それって転生特典なんですよ？そんなのわたし見たことないけどなんなのそれ？」

・・・えっちゃんはこう言った。

『『邪聖剣ネクロカリバー』です』

このキャベツの群れに捕獲者を

えっちゃん side

「お前すげえーじゃねえか！その武器邪聖剣ネクロカリバーだっけ？なんかライトセーバーみたいだし。かっけえよー」

「はい！爆裂魔法並みとは言いませんがとつてもかっこいいです！」

「ああ！それはどれくらいの切れ味を持っているんだ!？」

「それたぶんほとんどの物質は切れるでしょ？」

「はい。おそらく基本的に切れないものはありません」

大きいカエルを倒した後は、先ほど見せた『邪聖剣ネクロカリバー』についての話だったりわたしについての話だったりを話しながら歩いてました。

「というか、普通に『わたし』とか女口調？を自分で使っていますが長年使っていたような感覚で違和感がありませんね。」

「そーいやさ、お前はどこで寝泊まりするんだ？」

「？泊めてくれるんじゃないんですか？」

「あく、泊めるのは構わんが馬小屋だぞ？それでもいいのか？」

「構いませんよ。贅沢なんて言ってられません。それにやはり冒険者といえれば最初は馬小屋というものでしょう?」

「・・・うううう。」

「?なんででしょうカズマが泣いてしまいました。ここはやはり慰めるべきでしょうか」

わたしは、少し背伸びをしてカズマの頭をそつと撫でてあげました

「やっぱ、お前はいいやつだよ。はつきりいつてこのパーティーの中ではお前は天使だ・・・」

「ちよつとカズマここには本物の女神がいるんですけど?」

「そうですねよカズマ。ここには美少女がたくさんいるじゃないですか」

「あ?お前らが美少女だあ?見た目だけはいいかもしれんが中身が大問題だぼけえ!!」

「「え?」」

「何をやっても不幸を呼び込む駄目神に、一日一回しか魔法を打てない爆裂狂、さらにはモンスターに突撃しようとする変態クルセイダー・・・それに比べたら未井は天使だろうが!てか女神だわ!」

「「うううううう!!!」」

三人が必死に耳を抑えていますね。それにしてもなんででしょうか。カズマに褒めら

れると心がポカポカするとかドキドキするとか。うれしいですね。

そう思っていると突然。

『緊急クエスト！緊急クエスト！冒険者の皆さんは至急！！城門前にお集まりください！！』

カズマ side

「なんだこれ」

「おそらくこの時期でいえばキャベツでしょう。」

「キャベツ?！」

「知らないんですか？キャベツとはシャキシャキしている野菜ですよ」

「いやそれは知っているけど」

「ああそういえば二人は日本人だったわね。この世界ではキャベツは飛ぶのよ」

「・・・どうしよう帰りたくなってきた」

そういうと俺の服を未井がつかんできた

「いきましよう」

「なんで」

「報酬」

「わかった」

「このやり取りで分かってしまう俺も俺だけだよ。もうちよつとなんかないのかな。『いこ?』とかさ。」

「それじゃレッツゴー」

描写? ひたすらカズマがステイルとかえつちやんと協力して潜伏使つてとらえるだけですが? あと文章力のない自分にはあまりうまくかけないのでかけるようになったら書こうと思います。

「ご理解のほどよろしくお願いします。」

「いやー大量大量」

「これでしばらくは余裕があるだろ」

「そうですね。これで杖を新しくできますね」

「私は鎧をもう少し強化してみようと思う」

「わたしは特にないのでカズマに預けることにします」

「なんで俺なんだ?」

「お金の管理については任せます。自由に使ってください。それに、信頼していますの

で

「お、おうわかった。まかせろ！」

こうして、わたしのこの世界に来て初めての一日が終わった。

このあとですか？馬小屋でカズマの隣で寝ましたが、やはりカズマはヘタレでしたね。

隣に美少女がいるのに手をだしてこないとは・・・

このリッチーに優しさを

カズマ side

「・・・あの、今日のクエストは何にするんですか？」

「ああ、今回はアクアのレベルを上げるクエストに行こうかなと思っていな」

「じゃあ、なぜそのアクアは泣いているんだ？」

「こいつがバカなことを言うからな。ちよつと泣かしたただけだ」

「はあ、カズマ。あなたはけっこうな口撃力があるから女性に本気で怒ったらみんな泣くよ」

「そうですよカズマ。えつちゃんの言うとおりです」

「わ、わかったよ。今度から気をつける」

「そういえばダクネスはどこですか」

「ダクネスは鎧の修理状況を聞きに行ったぞ」

「そうですか。でしたらダクネスが帰ってきたらゾンビメーカーのクエストに行きましよう」

「おう、わかった」

「了解です」

「ほらアクア、行くクエストが決まったんですから早く起きてください」

「・・・すかー」

「寝てる・・・」

・・・子供かよ

「この子は子供なんですか？」

「えっちゃん、それは言っではなりません」

こいつの性格は変わっていないんだな。向こうにいた時から思ったことはズバズバ言っただけだからな。そのせいで何人の女の子が泣いたことやら。

こいつ男の時はイケメンだったけど、女になったらなつたでかわいいんだよな。

神は理不尽だ!!!

えっちゃん side

カズマが何もしていないのに少し涙を流しているが、大丈夫なのでしょうか？

「とりあえず墓地の近くまで来てみました。それらしい気配はありませんね」

「えっちゃん、まだ油断しちゃだめよ。今回はゾンビメーカーだから危険度は低いけど

これがもしリッチーだったりしたらなになにがなんでも倒すわよ。絶対に。」

「おいアクア。なんでそんなにリッチーを倒そうとするんだ？」

「リッチーは神の理から外れたものだからな、アークプリーストとしては許せないんだろう」

「そして、リッチーには種類がありまして自然発生したものと、魔法を極めたものが自分からなるといふ二種類です」

「は。ちなみにどちらが強いですか」

「もちろん後者ですね。自然発生したリッチーははつきり言つて普通のプリーストのターン・アンデッドでも倒せますが、後者はそうはいきません。なにせ、魔法を極めていきますからね、高い魔法防御力に魔法のこもつていない物理ダメージ無効。それに高い魔力値という高ステータスですからね」

「ほー、そういうえばゾンビメーカーの取り巻きは何体なんだっけ？」

「普通は2〜3体よ」

「なんか、索敵に引つかかった数でいうと6〜8体いるんだが…これって誤差の範囲内なのか？」

「い、いえ。その数はおそらくリッチーだと・・・」

「!!そういうえば、えっちゃんはどこだ!?!先ほどから見えないが!」

「お、おいどこいったんだよ!」

「おーい、ここです。ここにいますよ」

「?!あ、あのあなたは誰ですか!?!」

「あああああ!!!ここであつたが百年目!覚悟なさいリッチー!!」

「おい!未井!早くこつち来い!」

『ターン・アンデッド』オオオオオオオオ!!!」

「いやあああー?!?!な、何するんですかー?!?!や、やめてください!消えてしまいます!!わたしにはまだこの墓地にいる魂たちを送り届けるという役目がのこつているですー!!」

「やめてあげてください」

「やめてやれ」

ドスッ

「へブツ!!」

え・・・何今の。見えなかつただけ。それよりも、すごい音なつただけ大丈夫かな

「大丈夫ですか?」

「は、はい。ありがとうございます」

「私たちはゾンビメーカーの討伐を依頼されたのですが、あなたがゾンビたちを起こし

「ていたのですか?」

「す、すいません。ここにくると無条件でまだ肉体のある人たちが起きてくるんです」

「そうか。どうしようか、ここに来ることをやめてもらうことはできそうか?」

「ここに来ないと魂さんたちが地上にずっとさまよってしまふんです」

「そういうのはプリーストの仕事じゃないのか?」

「ええと、その、この町のアークプリーストの方々は、その、お金が・」

「ようはお金の入らないことはやらないということですね」

「……」

「な、なによみんなしてこっちみて」

「とりあえず、あんたはいったん帰ってくれるか?こここのことは俺たちで何とかするか
ら」

「そうですか!ありがとうございます!!私の名前はウィズといいます!この住所で魔道
具店を営んでいるのでぜひ来てください!」

いいひとだったなあ。

ん?それから?このあとわたしは眠たくてカズマにおぶさってもらって寝ていまし
たのでどんなやり取りをしていたのかはわかりません。

このヒロインに高額報酬を！

カズマ side

「なあ、クエスト受けたいんだけどなんでこんな高難易度のクエストしかないんだ？」

「ああ、それなら最近こちら辺のどこかに魔王軍の幹部が住み着いたため弱いモンスターはみんなどこかにいっっちゃったらしいです」

「はあ!? なによそれ!! それじゃあお金を稼げないじゃない! くっそー。魔王軍めえ。ア
ンデットだったりしたら私がすぐに『ターン・アンデット』で消してあげるわ!」
「そうだな」

確かに冒険者という稼業は基本お金がない。そのため毎日クエストを受けるんだが
この街の冒険者たちのレベルでは達成できないレベルばかりのクエストしか残ってい
ない

「そういえば、えっちゃんはどこへ行ったのだ? 先ほどから見えないのだが・・・」

「さつき一人でクエストに行くといっただきり見ていませんね」

「おい、さつきクエストには高レベルのクエストしか残っていないといっていないかった
か?」

「まさか。一人で高難易度クエストに!？」

「い、いやさすがにいかねえだろ・・・たぶん」

「さ、さがしましょう!!」「ただいま帰りました」ひゃっ!」

「び、びつくりした。よかつたクエストにはいつていないみたいね」

「いえ、いきましたよ」

「な?!どんなクエストにいったんだ!」

「い、今から教えるのでゆさぶらないでください」

「早く教えてください! えっちゃん!!」

「こ、これです」

『グリフオンの討伐』

報酬

100万エリス

内容

『山で薬草などの採集をしたいのですが、グリフオンがいるので採集ができません。』

グリフオンを倒してください!!』

『ドラゴンの討伐および捕獲または生態調査』

報酬

500万エリス

内容

『火山に今まで見たこともないドラゴンが現れたため調査をお願いします。』

火山には重要な鉱石などもあるため早急をお願いします』

『ヒュドラの討伐』

報酬

1000万エリス

内容

『洞窟にヒュドラが住み着いてしまったのでその討伐をお願いします。』

このままだといつ襲われるのかが気が気でないので早急をお願いします!!』

「なんだこりやーーーー」

「ひゃあああ!!!」

なんだこれ!!!なんで□!!!!!!」
んな高難易度クエストばかりやってんだよ!はつきりいつて

下手したら魔王軍幹部よりも強いんじゃないかこいつら!

「なんですかこの高難易度クエストの嵐は!!」

「これはさすがに無茶だ!!」

「もちろんあきらめたのよね!? またいくとは言わないよね!？」

「いえ、もう討伐完了したので・・・」

「「「はああ!!!」」」」

「これ今朝受注したクエストですよ!？」

「おいおい、こんなのこんな早くクリアするどころか、討伐自体あきらめるだろ普通!!」

「いえ、邪聖剣じせいけんネクロカリバーねろかりばがあつたので簡単でした。冒険者カードをどうぞ」

・・・まじかよ

「ほ、本当に討伐完了しています・・・」

「生体調査のほうはどうなんだ」

「あのドラゴンですか、火竜というよりは爆発系の攻撃ばかりでしたので命名するなら

爆竜でしょうか?」

そのまんまだな

「あ、それより報酬ください」

「は、はいすぐに準備します」

(カズマ、あの子強すぎじゃない?)

(そうだな。)

「どうしたのですか？みんなしてそんな私を見つめてきて」

「あなたはなんというか、すごすぎて常識が通じませんね」

「あたりまえです。これでも一応英霊の力を持っているのですから」

「……英霊??」

「ま、まあその話はあとにしようぜ!!」

「あ、あとカズマ」

「ん？なんだえっちゃん」

「この報酬はあなたに差し上げます」

「!?いい、いやいいよ！こんな高額。おまえの好きに使え」

「そうですか、では家を買いますし。でもこんな高いお金をつかって買う家はさぞか

し大きいのでしょうか。誰か一緒に住んでくれませんか？」

　　そういいちらちらこつちを見つめるえっちゃん。ほんとわがままになってきている

なあ。かわいいけど

「はあ、わかつたよお言葉に甘えさせていただきます」

「うんうん、最初からそうしてればいいのです」

　　こうしておれたちは家を手に入れた

このヒロインに高難易度クエストを

えっちゃん side

わたしは、まだカズマたちが寝ている間に起きてしまったので、朝早くにギルドに来ていた。

「おや？えっちゃんではありませんか。どうしたんですか？こんな朝早くに」

「いえ、クエストをやろうと。」

「そうなんですか？さっき見たときは高難易度クエストしかありませんでしたが……いいクエストがあるといいですね。それでは私は少し散歩に行ってくるのでまた後で」

「はい。めぐみん。また後で」

めぐみんと別れたあと、わたしはクエストボードの前にいきました。

「何かいいクエストは……何故でしょう。高難易度クエストしかありませんね」

ギルドボードに書いてあったのはいづれも難易度の高いクエストばかりだった。

「……この体は英霊『謎のヒロインXオルタ』の体……ならば、これらのクエストもクリアできる……?」

取り敢えずやってみましょうか。

「すみません、これとこれとこれをやらせてください」

「はい……え?! ちよ、これはダメです! あなたは期待の新人! こんな危険なクエストをこんな早い時期からやらせるわけにはいきません!」

「大丈夫ですので。はやく」

「……わかりました。いくら言っても聞きそうにないのでこれらのクエストを受理します。ですが! これだけは言っておきます。絶対に帰って来てください。危険と思えば直ぐに。そうしないと、わたしがみんなにどやされるので…」

「わかりました」

「それでは、行ってらっしゃいませ」

意外に簡単に行けたな

場所は飛ばしてグリフオンのとこまできました。

はつきり言わせてもらおうと移動方法がなれないときついです…

回想……

『これ、オルタリアクター臨界突破したら、はやく移動できるのでは?』

ブオン!

『早速試してみましよう』

ズガッ! ビリビリ
!!!!

『さあ、いきますか』

ズオオオー
!!!!

『おお、早いですね』

.....!

『う!! や、やばい... はきs.....』

く回想終了く

「はあ、慣れるまで練習しましょう。」

ところで、あれがグリフォンですよ? 鷹の顔にライオン? の体がグリフォンであつてますよね?

「でかい...」

まあ、おそらく簡単に終わるでしょう

ブオン
!!!!

勝負です…

はつきり言います。

弱すぎです。

あれが高難易度でしたら魔王はどれだけ強いんでしょう？これより弱かったらもう負ける要素がないですね。

さて、次はヒュドラです。ちやつちやと討伐しますよ。

「あの、ここがヒュドラのせいで困っている村でよろしいのですよね？」

「は、はい！あなたが来てくださった冒険者ですか？」

「ええ、そうです」

「あの、失礼ながらあなたのような女の子が討伐できるような弱い相手では…」

「大丈夫です。グリフォンもさつき討伐しましたし、そこらの冒険者よりも強いので」

「そ、そうですか…ではこちらへ。案内します」

「お願いします」

———
そうしてたどり着いた場所はこれぞ洞窟といったげな場所でした。

イメージで言えばドラ○エに出てきそうですね。

「ここにヒュドラが住み着いてしまってます。ここは村にかなり近いでしょう？なので、皆が毎日怯えて暮らしているんです。お願いします！ヒュドラを倒してください！」

「わかりました。ですが、あなたはもう少し声を小さくしてください。ヒュドラが出てきてしまうではありませんか…というか出てきましたね。」

「え……」

グギヤアアアアアアア

「ひ、ヒイイイイイ！！！！！！！！！！」

「ほら、早く離れてください。邪魔です。」

「わ、わかりましたああ……」

ふう、さつさと倒して火山に行きましよう。

ですが、やはりかっこいいですね。想像通りです。さつきのグリフォンより強ければいいのですが。

まあ、負けるつもりはありません。宝具は……必要ありませんね。
「5秒で終わらせましょう」

「ありがとうございます!!あなた様はこの村の恩人です!」

「!!「おおお!!」!!」

「あんなちっこい子がヒュドラを倒したのかよ!凄すぎんだろ!」

「やべえよ!ぜってえどっかの凄腕冒険者だぜ!」

「あの、もう行ってもいいですか?」

「いえいえ、もう少しいてください。あなた様には皆感謝しておりますので。」

「いえ、次のクエストがあります。それに遅いと仲間に心配をかけてしまいますので。」

「ここで失礼します。」

「そうですか。では、この近くに来た際にはいつでもいらしてください。私たちはあなた様とあなた様のお仲間達に最高の礼儀を持っておもてなしさせていただきます。

皆のもの!冒険者様がお帰りになられるぞ!礼をいえー!!」

「!!「この村をお救いくださいありがとうございます!!」!!」

「それでは。さようなら」

「ふう、結構時間がかかりましたね。では、帰りますか」

そして、前話のカズマ side の話に戻る…

「はあ、えっちゃんのおかげで臨時収入が入ったがこれからは一人で行こうとしないでくれ。心臓に悪い…頼むな？」

「……………わかりました」

なぜ怒られるのでしょうか？みんなのためと思つてやったのに。嫌われました？カズマに嫌われたら私にはもう行くところがありません。…あれ？なんで涙が？

「わかりましたから…捨てないで…………」

「な！なんで捨てるつて発想になるんだよ！捨てないよ！これからうちのパーティーにいてもらうから！泣くなよ！」

「ほんと？」

「本当だ」

「よかった」

そこからは、寝てしまったので覚えていませんが。捨てられないとわかってから、何

故
か
心
が
暖
か
く
な
り
ま
し
た
。

この首なし騎士にヒロインの恐怖を

カズマ side

「カズマ。ちよつと私に付き合ってくれませんか？」

そういつて俺を誘って来たのはめぐみんだった。

「なんだ？俺に何して欲しいんだ？」

「いえ、ちよつと爆裂魔法を打ちたくて。なのでついて来てくれませんか？」

「そんなの一人で行けばいいだろ。俺を巻き込むな。」

「撃つた後は誰が私を運んでくれるんですか！」

「、こいつ開き直りやがった！」

「まあ、いいじゃないですか。私も一緒に行つてあげますから。それに。私も最近魔物を狩りたくてウズウズしているんです。途中で出た魔物は私が倒すので安心して撃つてください。」

「おお！流石えつちゃんです！カズマも見習ってください。」

「いや！こいつのたまに出るバーサーカーモードは見習えねえよ！」

そう。実はあの高難易度のクエストにいったつきりえつちゃんはたまに強敵と戦い

「たいといって、一人で森に行こうとする（俺はバーサーカーモードと呼んでいる）。
「何をいまさら言っているのですか?・・・ああそういえば私の職業を言っていないで
したね。これをどうぞ」

名前；謎のヒロインXオルタ

職業；バーサーカー

「つて、ちよつとまでえーい!」

え?え?えつちやん前はセイバーって言つてなかつたつけ?!なぜ違う職業?!

「お前。前はセイバーって言つてたじゃないか!え?変えたの?」

「いえ、変えてませんよ。ただ、バーサーカーか、アサシンしか適性がなかったのでバー
サーカー兼セイバーにしようかと・・・」

何考えてんの!?!馬鹿なの!?

「そ、そこまで言わなくても・・・それにこの体の英霊はもともとバーサーカーですし・・・」
「はあ、まあこの話はもうなかつたことにしよう。で、めぐみんはどこにいきたいんだ
?」

「お!!きてくれるのですね!では、行きましょう!近くに廃城らしき場所があつたので

そこで撃とうと思います！さあ、カズマとえっちゃんもいざ！爆裂道へ！！

「いや、ついていくだけで爆裂道には染まらないから」

「うう、そんなはもらなくてもいいではありませんか・・・」

そんなこんなで俺とえっちゃんはめぐみんの日課となる『一日一発爆裂魔法を撃つ』に付き合うこととなった。

「おお！期待以上の爆裂し甲斐のあるいいお城ではありませんか！」

「どうでもいいから早くやってくれ。ここは安全というわけではないんだろ？」

「大丈夫です。カズマとめぐみんはわたしが守ります。・・・!!近くに一撃熊の反応がありました。少し行つてきます。」

そういつてえっちゃんが走り出そうとしていたので俺は強引に止めた。

「ちよつとまで。依頼も受けてないのに倒しても報酬はもらえないだろう？」

「もらえますよ？それに、こんなこともあるうかと討伐系の依頼はあらかた受けていますので心配は無用です。」

「いや、それでも一人で行くのは・・・」

「カズマ。もう忘れてしまったのですか？えっちゃんは高難易度クエストだろうが一人でクリアできるほどの腕を持っているではありませんか」

「大丈夫ですので。それではいつてきます」

「あ、おい！」

たしかに、おそらくえっちゃんの実力は今までこの世界に転生した地球人の中でもトップクラスだろう。だが、それでも一人で女の子が熊だとかドラゴンに挑むということには不安がある。

「もう、カズマは心配性なんですから。それより見ていてください。おそらく今まで一番いい爆裂魔法が打てますよ！」

それから、俺たちの日課が始まった・・・

それは、明るいお昼頃の時

『エクスページョン!!』

それは、寒い雨が降るとき

『ブロージョン!!!』

朝の散歩の間に

『ジョン!!!』

そんな日々を毎日続けていた。

『エクスブロージョン!!!』

「お、今日はなかなかいい感じだったぞめぐみん。ナイス爆裂!」

俺がサムズアツプしながらそう言う。倒れているめぐみんが同じくサムズアツプしながら

「ナイス爆裂。ふっふっふ。カズマも爆裂道がわかってきたのではないですか?これを機にアークウイザードに転職して同じ爆裂道を歩むのはどうでしょうか・・・」

「爆裂魔法かあ。引退前になって遊ぶのもいいかもしれないな。」

「さあカズマ、めぐみん。帰りますよ。今日は、初心者殺しとグリフォンを討伐したので

報酬には期待しててください。」

「おう、わかった。」

「それにしても。えつちゃんはすごいですね。王都でもやっていけるのではないですか？」

そう、えつちゃんのおかげで毎日臨時収入が入り、いまでは貯金が約2億エリスにまでなっているのだ。

「ああ、なんでお前はこの初心者の町にずっといるんだ？」

「そんなの、決まっていますよ。カズマたちがいるからです。それ以外に理由はありませんよ」

そういうえつちゃんはどこか儂げで、いまにもいなくなってしまうような表情だった。その顔に不謹慎ではあるだろうが、おそらくめぐみんも同じであろう。顔が赤くなっていた。そう、見惚れていたのだった。

えつちゃん side

めぐみんの日課が始まって数日後・

「あ、おいえっちゃん!!」

カズマ side

「すみません。たぶんそれ私の仲間です。」

えっちゃんが、そんなことを言いながら前に出て行く。

「ほお。正直に出てきたところは誉めてやろう。だが、この俺が魔王群の八人しかいない幹部の1人だ「知りません」・・・は?」

「いえ、あなたがどこの馬の骨とも知りませんし興味もありません。」

・・・ぷ!そ、そんなこと言つてやんなよえっちゃん。デュラハンさんがかわいそうだぞ・・・ククツ。

「・・・ほ、ほおう、そ、そうか。だが、おれはこの地に調査をしに来たただけだ。そこまです殺しはする気がないが。このまま帰るのは幹部としてメンツが立たんからな。そうだな・・・さつき貴様と話をしていたあのおとk

ザっ!!!

「???」
「ガキン!!!」

「!?」
「誰を殺そうとした。」

もしカズマを殺そうとしたのなら、貴様・・・殺すぞ・・・

そんなことを言っているような目でデュラハンに見えない速度で急接近しあのネク

ロカリバーを叩きつけた。

「ひっ!!!」

見るだけでわかる。デュラハンが恐れている。かくゆう俺もかなり怖い。

スツ

ザザ!!!

『……魔力^{オルトリアクター}転換炉臨界突破』

そう言っつてえっちゃんやんが懐から新たな筒状の棒を取り出したかと思うと光剣が出てきた。

……もうあれ、ビームサーベルだろ。

「ま、まて！小娘!!話し合おうではないか!!」

『……我が暗黒の光芒で素粒子に還れ!!!!!!』

「ゴ!!!グギ!!!オゴオ!!!」

『黒龍双剋勝利剣!!!』

その直後、光がクロス状になって消え去っていった。

ま・・・気をゆr・・・きさ・・・わたs・・・宝具を・・・またよr・・・
会おう。

？何か聞こえたか？まあいいや。さつさと帰ろう。

この神器に祝福を

カズマ side

「なあえつちゃん。ウイズの所に行かないか？」

「ウイズとは誰ですか？」

ガクツ

「いや、前墓場で会ったリッチーだよ。」

「ああ、あの人ですか。」

こいつ。本当に忘れていたのか？

「そう言えば。あのデュラハンの討伐報酬などは受け取らないのですか？」

「ん？ああ、なんでも結構な額らしいから準備に時間がかかるらしい。」

「そうですね。……もし、出し渋ったりした場合屋敷を破壊し尽くしてその領主を恐怖のどん底に落としてから早急に払わせますか……」

「……なんか物騒なこと考えていないか？」

「そんなことないです」

？…なんか嫌な予感がするな。とりあえず、領主さん逃げて超逃げて。とだけ思ってお

くか。

「さ、行きましょう。カズマ。」

「お、おう」

えつちゃん side

「そういやさ、えつちゃん。」

「なんですか？」

「お前、あのデユラハン瞬殺しただろ？」

「そうですね。」

何が言いたいのだろう。謎のヒロインXオルタの力なんだから普通じゃないの？

「いや、今までの転生者たちでも倒せなかったのにすげえなあくと思ってるさ。」

確かに。今までの転生者たちの中には私と同じような宝具を頼んだものもあるはず。なのに何故こんな簡単に倒せたんだだろう。

ん？そう言えば。この世界に来た時に紙が最初からポケットの中に入っていたよね。それを後で読んでおこう。

「ん。……だな」

見た目は普通の魔法道具店ですね。

「おーい。ウイズいるかー?」

「はい。…あ!カズマさん!いらつしやいませ!本日はどのようなご用件ですか?」
「前リッチーのスキルを教えてくださいって言ってくれたろ?だから教えてもらおうかと思っつてな。」

カズマ達が何か話していますが、興味がないのでそこら辺のポーションとか神器みたいなのを調べて見ます。

「あ!えつちやんさん!それは振動を加えたら爆発するポーションです!」

・・・戻しましょう。それでは隣のポーションを・・・

「あ!それは濡らしたら爆発するポーションです!」

「……あの。ここは爆発するポーションしかおいてないんですか?」

「い、いえそこがたまたま爆発系のポーション棚だっただけですよ」

苦笑しながらウイズはそう言った。

「なら、この神器は?」

「それは確か、性別が反転する神器だったような気がします。」

「へえ。そんなのがあるんだな。」

……起動の仕方は恐らくこうでしょう。

時間差起動にして。

「カズマ…これを持っていてください。」

「ん？わかった。」

よし。カズマに持たせてしばらく経てば…

「?!なんか光ってんだけど?!」

「ちよ！えっちゃんさん！起動できたんですか?!」

フンス！

当たり前です。この程度の神器見ただけで簡単にそうさでき…？何故操作できるのですか？

「お、おい！ドヤ顔からの疑問系はやめろよ！こわ、ちよ！ヤバ！」

ピカー…!!!

う！眩し！

「キヤアア!!!」

—————

どうしたのでしょうか。突然眩しくなって…あ！カズマは?!カズマは大丈夫ですか?!

「うろう」

「その声はウイズですか？どこにいるんですか？」

「こ、ここです」

ヒラヒラと手を振りながらこちらに近づいてくるウイズ。

よく場所が分かりましたね。あ、そう言えばウイズはリッチーでしたね。

「カズマはどこですか？」

「こ、ここだー。た、助けてくれー！」

この声は…女の声？ですが、雰囲気はカズマでしたね。

ゴホゴホ！

煙が凄いです。

「ウイズ。窓を開けてもよろしいですか？」

「構いませんよ」

ところで、あの爆発系のポジションたちはどうしたのでしょうか？あの振動なら爆発してもおかしくないのに。

『不思議パワーだよ』

?!何か聞こえた！

『後でね！』

聞こえなくなりました。

「！それよりもカズマです！大丈夫ですか！カズ……マ……」

「な、なんだよえつちゃん。どうせ可愛くないんだろ？分かってるよそんなの。だから、早く感想を言えよ！」

か、かわいい!!!

「に、似合ってます。」

「え？」

「かわいいですよ！カズマさん！」

「は？どゆこと？」

見た目で言えば。

身長はジャック・ザ・リッパーほど。髪の毛の長さは茨木童子ほどで、見た目が限りなく近いのは沖田総司でしょうか？まあ、言って仕舞えばアルトリア顔。そして、服も何故か新撰組。沖田総司の幼女化みたいなものでしょうか。

とても似合っていて、かわいいです。

何故、沖田総司なのでしょうか。あ、そう言えば使う際に私は沖田総司みたいな姿がいいと思い、想像しましたが、もしかして操作した人が想像した姿（性転換に限る）になるという能力でしょうか……

「まあ、別に動くのに不便はしない。というか逆に動きやすくなった。」

「カズマ。冒険者カードを見て見ててください。」

「何故見るのですか？」

「恐らく、姿が変わるのは1日だけでしよう。その間ステータスの方もなった姿の元となる人のステータスの恩恵が得られるかもしれませんが。」

「ふーん。ちよつと見てみるか。」

意外に落ち着いてますね。

「えつちゃん。その顔は『意外に落ち着いてますね』って顔だな」

何故分かったし！この顔は凄いポーカーフエイスのはず！

「な、何故分かったんですか？私にはほとんど無表情にしか見えませんが。」

「こいつは昔からというか、まあ、ほとんど無表情なのは変わらないからな。」

クッ！ここで幼馴染ということが裏目に出してしまうとは！このX一生の不覚！！

「おい、遊んでないで要件済ますぞ」

「はい……」

カズマは幼女になっても変わらないんですね。

「それでは、今回は『ドレインタッチ』というスキルを教えてくださいと思います」

「ああ、頼む」

「それで、えつちゃんさんに頼みがありました……」

「なんですか?」

「実は、私のスキルは基本もう一人私のスキルを受けてくれる方が必要でして・・・」

ふむ。つまりわたしにそのスキルを使ってカズマが覚えるということですか・・・

「かまいませんよ」

「!本当ですか!!ありがとうございます!!」

少しはしゃいでますね。

というか、さつきからカズマは何をしているのですか・・・

いくら沖田総司に似ているからと言ってそんな刀を構えなくてもいいのに・・・って

刀?!

「あの、カズマ・・・その刀はいつたい・・・」

「さあ?なんか武器ねえかなって思ったら出てきた」

もう英霊でいいのではないのでしょうか?

『それは困るな。彼にはもう渡す英霊の器は決まっているんだ。こういうことはもうしないであらうよ?』

だからさつきからあなたはいったい誰なんですか!

『夜に夢の中で会えるよ。それと、この世界に来た時に渡した手紙は早めに読んでくれ』

「はあ、わかりましたから消えてください。」

「なあ、早くやってくれよ．．．」

「ああ、すみませんねカズマ．．．さ、早くやりましょうウイズ」

「はい。それでは．．『ドレインタッチ』!!」

!!!こ、これは結構きついですね。おそらく少ししかとつていないつもりなのでしょうが、そこはやはりリッチーというべきか。本家だからかもしれないませんがもう少しとられていたら立つことが不可能になっていましたね．．．

「はい。カズマさん冒険者カードを見てください」

「わかった。ついでにステータスも見てみるよ．．．おお! あったぜ『ドレインタッチ』それと、ステータスのほうは．．．え?」

「よかったですね。ところでステータスはどうなっているのですか?」

おそらく、その姿ならあの時のデュラハンさえも簡単に倒せるでしょう．．

「なんか、信じられないほど上がってる。筋力なんてさつきまでの何十倍以上はある．．．」

「やはりですか。その姿は英霊沖田総司に限りなく近いですからね．．．まあ、幼女ではありませんが。」

「まじかよ」

「で、ですが強くなったんですよね！ならこの際容姿なんて気にしなくてもいいんじゃないでしょうか！」

「そ、そうだな！」

「それでは、帰りますよ。カズマ」

「え、い、いやもう少しここにいてもいいんじゃないか？」

「めぐみん達にも見せてあげないと・・・」

「いやだ!!ウイズ！助けてくれ!!」

「え、えつちゃんさんそのくらいにしといたら・・・」

「どうせ会うことになるんです。それでは、失礼します」

「ああああああ!!!」

「・・・頑張ってくださいカズマさん。」

「あ。おかえりー」

「えつちゃん。カズマはどこですか？」

「ああ、そういえば見えないな。」

「はいです」

わたしはそういつてカズマ（沖田総司の姿）を前に出した

「うわあ!!」

「「・・・」」

「あ、あははは」

「「「はあああああつあああ!?!?!?!」」」

「おや、どうやらギルド中の人^ハたちも驚いたようですね。

「お、おい。お前本当にカズマなのかよ・・・」

「あ、あの鬼畜のカズマがこんなかわいらしくなるなんて!!」

「「はあはあ。いい!!!」」

「こんなかわいらしいなら。このままでいいんじゃないね?」

「プププ!!カズマさんったらこんなかわいい幼女になっていったい何するのかしら?」

「（絶句）」

「う、うむ。かわいいな」

「あ、ちなみに一日で元に戻りますので。いま変な発言をした人たちは覚悟しといたほうがいいですよ。この姿のカズマはいつもの数十倍は強いですから」

「「「「「・・・」」」」」」

・・・・ス・・・カチ

隣から刀を抜く音がしましたね

「・・・死ね」

と、同時に空気が切り裂く音がしました。
そしたら。

ストンっ！

「「「きやああああああああ
「「「うおおおおおおお!!!」

男の冒険者（先ほど変なことを口走った人たち）のズボンが勢いよく地面に落ちました。

「カズマ。今日はついでに家を買うのでしょうか？」

「あーそうだった!!はやくいくぞえっちゃん!!後、お前等!!次変なこと言ったらちよん切るからな!!」

「(((ナニを?!)))」

「めぐみんたれもいくぞ!!」

「あ、まちなさいよ!」

「ほら、ダクネスもいきますよ!」

「はあはあはあ、やはり根本はカズマだったか!!」

購入時に屋敷を買うことになり、冒険者だからという理由で拒否されかけましたがわ

たしとすこしオハナシした後お金を見せたらすぐに紹介してくれました。後なぜか少し値下げもしてくれたのできつとわたしとのオハナシが効果的だったのでしようということを言ったらみんなになぜか苦笑されましたがまあいいでしょう。それよりもなぜ屋敷を買ったのかというとお風呂があつたからです。今日は（というより毎日）一緒に入りたいたいからです。同じ性転換者ですしね。

「さあ、もう暗くなってきましたし。お風呂に入つて寝るぞ」

「では、カズマ。一緒に入りましょう。」

「そうね、あんたらは一緒に入ったほうがいいでしょう」

「まじで?」

「さあ、行きますよ」

カズマ side

ひどい目にあつた。

いろいろ知りたくもないことまで教えられた。

「さあ、もう寝よう早く寝よう」

「そうですか。それでは、おやすみなさい。カズマ」

「おう、みんなもおやすみ〜」

こうして波乱な一日が終わった。

「ここは・・・夢の中か？」

『そうだ』

だれだ？

『わたしか？わたしは英霊だ。真名は『エミヤ』だ』

そこに立っていたのは褐色肌で白髪のイケメンだった。

なにより特徴的なのはこの世界だ。夕方なのか空はオレンジ色。そして、周りには数

えきれないほどの剣だった。

『ここは『無限アンリミテッド・ブレイドワークスの剣製』だ。これはわたしの宝具だよ』

へー。

『あまり驚かないのだね。・・・ああ、君の近くにもサーヴァントがいるのか。』

そのサーヴァントがなんなのかしらないけど。おれの幼馴染がその宝具とかいうやつで俺たちを守ってくれたからな。

『ふっ。どうやら君にはそこまで力を欲していないみたいだね』

いや？力はほしいよ

『ほお。何のために？』

決まってるだろ？

みんなを守るために。もう、えっちゃんにはかり負担をかけることはしたくない

『そうか・・・ならば、わたしの力を君に託そう』

え!?!いいのかよ!

『なに。かまわんよ。しばらくわたしの出番はなさそうだからね。それに君なら託して

も問題はなさそうだ』

でも、使い方がわかんねえぞ？

『使い方は君の記憶に直接送り込んである。それでは。魔王討伐頑張ってくれ。』

あ! まっけてくれよ!

『またいざれ会えるさ』

そうか。じゃあな

『ああ、君の頑張りにわれら英霊は期待しているよ』

エミヤはそういつたらもう消えていた。
おそらくもう目覚める時間なのだろう。

絶対に魔王を討伐してみせる

!!!!!!!

この神様？からの説明に祝福を

えっちゃん side

さて、夜ですが…あの紙まだありましたっけ？

ちよつと探しましょう。

ガサゴソガサゴソ

く数分後く

ガサゴソガサゴソ！

ありました！

さて、早速読んで見ましょう。

『面白い魂の転生者へ

やあやあ！やつと読んでくれたね！僕は神さ！』

知ってます。

というか、イラっ！ときますね。

『今イラっ！ときただろう？ごめんね??僕、昔からみんなをイラっ！とさせる喋り方に

「なるんだ!そこを了承の上で読んでね?」

?もしかして、リアルタイムで書かれている?

『正解!さ!それらはさておき。何故君がそんなに強いのかを説明するね。』

まず、君が強い理由は簡単さ!この世界のステータス自体が数値化すると魔王でさえ今の君よりちよつと強い程度だからね!君にはおまけとしてレベル1の時点で君が選んだ特典『謎のヒロインXオルタの容姿と能力』の謎のヒロインXオルタの最高ステータス(聖杯使用後)と同じだね。更にそこから上がっていくから最終的には君のステータスは下級神では勝てないし、中級神では本気を出しても勝てない可能性が出てくるレベルに強くなるからね。そして、宝具レベルも最高になつてはさ!キラッ!』

え?それは強すぎじゃない?

『ちなみに、君の好きな人も英霊の器にちようどよくてね。とある英霊が彼に能力を与えるはずさ!』

わたしの好きな人?カズマのことか?わたしはカズマのことが好きなの?まあ、今はそれより手紙だ。この事は後で考えよう。

『そして、君の今の実力は魔王を超えたあたりのはずだよ。その力。決して悪用しないでくれよ?君とカズマくんの父親たちから怒られるのは僕なんだから』

?何故わたしたちの父親から神が怒られるの?

『おや、その反応は知らない感じだな？まあ、答えは直ぐにわかるさ。今の君たちの実力ではあれらに勝てないからね喧嘩を売ってはダメだよ？』

あれ？あれってなんだ？

『そうそう。君のネクロカリバー。そろそろ壊れる頃合いだから、注意して戦いなよ？あと、冬はクエストをやらないことをお勧めするね。クエストをやれば君たちに不幸が訪れてしまう。それだけは避けられないからね。君も一度想像して見たら？今の自分にとって一番不幸なこと。』

一番不幸なこと？カズマが死ぬこと…カズマが死ぬ？そんなのありえないわたしがそばにいるからだってかずまはわたしにとっていちばんたいせつなそんなざいなんだからわたしがつねにそばにいててきからまもってあげないといけないねそれならいまからでもかずまのへやにいかないと……

『わーわーストップストップ！君に不幸なことを聞いた僕がいけなかつたね。まあ、そんなことだから冬はクエストをやらないこと。ね？じゃあね？また僕と連絡したかったらこの紙をもつといいよ。』

は！わたしはいま何を…

それより、なんでおまけをくれたの？

『君は男でありながら女の魂を持つていたからね。だからその体と魂が一致しやすかったんだ。それに君は面白かったからねそれが理由さ！それではまたね？』

そう出た後は文字がどんどん消え始めた。

そうか、わたしが強い理由はこれだったんだ…

二章

この素晴らしい報酬に祝福を

カズマ side

今日は待ちに待ったデュラハン討伐の報酬を受け取る日だ！楽しみだなあ。なにせ、魔王軍幹部だからな！次からは恐らく俺もえっちゃんおの戦闘に加われるだろうけど今回はえっちゃんのおかげで大金を手に入れることができるからな！……はあ、こんな事ならアクアを転生特典に選ぶんじゃないかと俺も特別な力を選べばよかった……はあ。

ま、それはさておき。ここの領主はいい噂が基本的にないらしい（神さま情報）。だから俺たちの報酬を何か理由をつけて借金にするか、払わない可能性があるらしい。

ちなみに、それを聞いたえっちゃんは何処かへ行った後数時間経過してから帰ってきた。何をしてきたんだろう？

「ところで、アクア達はどこ行ったんだ？」

「アクアでしたら先にギルドに行くと言っていましたよ。なんでも宴会芸スキルを使って欲しいらしくて。めぐみんとダクネスはアクアについて行きました。」

おい。あいつは一応女神なんだからもつと女神らしく行動しろよ……宴会芸で呼ばれ

るとか。もうあいつ宴会芸の女神でいいだろ。

「カズマ。いくらなんでもそんな考えはいけません。一応あれでも水の女神ですよ。」

「お前は俺の心が読めるのかよ…」

「ある程度は」

他者視点の場合。（主にわたしからしたら）もうこいつら夫婦でいいんじゃないやねえの？こいつらこれで付き合ってすらいらないんだぜ？ちなみに、ギルドでえつちゃんに声をかける男がないのはカズマとえつちゃんが付き合っている。もしくは結婚しているという噂がありえつちゃん自身が他の人（カズマはえつちゃんに關してはとても鈍感になる。えつちゃんからの好意は親友としての好意としか思っていない。）からわかりやすいほどにカズマのことを好いている。

『ちーリア充め！爆発しろ！』

『見てて砂糖吐きたくなる！』

『く！今日はヤケ酒だ！』

「何かみんな殺気だつてんなあ」

「何故でしょうかね？つと。ギルドに着きましたね」

「ああ、さつさと報酬もらって家帰るぞ〜」

「宴会に参加しなくても良いのですか？」

「んー。えつちゃんは どうする？」

「わたしは一応参加する気ですよ」

「なら参加するか」

そう言えば。あのデュラハン：魔王軍の幹部なんだよな。結構高い賞金だったら良いなあ。

えつちゃん side

この街の領主ははつきり言ってクソ野郎でしたね。あれはいづれもつとひどい目に合わせましようか。賞金のことも廃城を破壊したからと言って修繕費に借金を背負わせようと思いましたし。：廃城なんですから直す必要ないですよ？なのでオハナシをしたら少し時間をかけましたが納得してくれましたので報酬も期待しておきましょう。何兆エリスといくんでしよう。楽しみですよ♪

「おーみんなー!!!今日の主役が来たゾォー!!!」

「「ウオオオおおお!!!」」

「やっぱすげえよお前ら！冒険者になってそこからまでたつてないのに魔王軍幹部を倒すなんてな！」

「当たり前です。わたしのレベルはデュラハン討伐の時にはもう39めでいったんです。今は43ですが…」

「ははは！どうやらお前らには常識が通用しないらしいな！」

「おい。その『お前ら』に俺も加わってんのかよ…」

「当たり前だろ！こんな化け物達のリーダーなんだからよ！」

その返事に対してカズマが「えっちゃんはともかく。アクア、めぐみん、ダクネスはただの馬鹿なだけだから！それに俺は化け物じゃねえ！」と言いました。あの。わたしも化け物ではないのですが…

「まあまあ。早く報酬をもらいに行きましょう。」

「そうだな。」

そして。わたしとカズマは受付の前まで来ました。

「お待ちしておりました！カズマ様！そして、カズマ様とのお仲間の方々には普通の報酬と特別報酬がございませう！」

うおおおおおおお！！！！

「まあ。当然ですね」

！！！！

「カズマカズマ！これではばらく飲んで暮らせるわね！」

「ああ、暫くは危険なこととはしなくても済みそうだ」

「な！それは困るぞ！」

「困るのはダクネスだけなのでは？」

「ま、早く報酬をくれよ。」

「はい！こちら！報酬金の三億エリスです！」

「二三さ、三億うううう!!?!?!?!」

す、少な！これくらいでしたらやろうと思えば1日か2日ぐらいで貯めることが出来

そう…

「よっしやああ!!!今日は俺の奢りだアアアアア!!!」

「二二うおおおお!!!よっしやああ!!!」

ま、カズマが楽しそうなので良しとしましょう。

その時のえっちゃんん表情を見ていた少年の冒険者はこう語った。

『あの時のえっちゃんんさんの表情は何処か、狂気を持っていてそれでとても恍惚と
していて。僕はその表情に心を奪われました。とても、色っぽかったです…』

この二度目の死に絶望を

えっちゃん side

わたしたちに三億エリス（十約二億エリス）の大金が手に入った…これでしばらくはクレストを受ける必要がなくなりましたね。それに、いまは冬ですから出て来る敵も強いものしか存在しないらしいです。

「ねえねえカズマさん。」

「はいはいカズマだよ〜?」

「お金を貸してくださいな?」

「何故ですか?」

「デュラハン討伐の報酬を全部使っちゃったのよお〜!!それに、多額のツケもあつてあと3日以内に返さなくちゃいけないのよお〜!!!」

「お前は馬鹿か!あの時のデュラハンの報酬を分けて個々で使おうって言ったのはお前だろーが!!それをたった一ヶ月以内で使い切るってどんな使い方したんだ!!」

「だって、私の分がえっちゃんよりも少なかつたじゃない!!」

「当たり前だろ!!あのデュラハンを倒したのは全部えっちゃんの力だろーが!それでも

分けてくれたえっちゃんに礼を言うことはあっても非難する筋合いはねえーよ!!」

そうです。先程から流れて来る声はカズマとアクアの言い争いです。

デュラハン討伐の報酬を受け取ったあとわたしたちは家に帰り報酬をどうするかと言う話をしました。

カズマはわたし一人のお金にしてもいいと言ってくれたのですが、仲間なので分けることにしました。それを聞いたアクア以外はとても嬉しそうでしたが、アクアだけは『当たり前ね』見たいな表情でしたのでカズマがアクアの分だけ他のみんなよりも少なくなりました。

「なら、クエストに行くのはどうですか?」

「今は冬だろ?外に出たくないんだよ。」

「流石の私も冬はクエストに行こうと思わないな…」

珍しくダクネスがクエストに行きたくないと言いました。

「めぐみんはいいクエストを知っているのですか?」

「雪精というとても弱いモンスターがいるのですが、その討伐報酬が十万エリスなのです。」

…最後のセリフで某艦隊ゲームのでんちゃんを思い出しました。

「それよ!それに行くわよ!さあ!みんなも早く準備をして!」

「「……はあ。」」

ため息をつきながらもちやんと準備をする時点でみんなも優しいですね。

…そう言えば、カズマがギルド内で鬼畜のカズマと呼ばれていたのですがどういこうとでしよう？

カズマ side

「それじゃあ作戦通りえつちゃんは手を出さないでくれ」

「分かりました」

「んじや、ダクネスが集めてそこをめぐみんの爆裂魔法で一気に倒す。それで行くぞ。」

「ねえねえカズマさん。私は何をすればいいのかしら？」

「お前はなにもせずに座って待ってろ。」

「それが妥当です。さ、一緒に休んでいますよ。」

「ああ、アクア。私たちに任せておけ。」

「さっさとアクアの借金を返して帰りましょう。」

あ、カズマ。後でお酒を飲んで見たいのですが…」

「それはまた今度な」

この世界では酒を飲むのに年齢は関係ないとは言えめぐみんなが酒を飲むのはあまりいいとは言えないからな。みんなが見ていられるとこでならいいだろ。

———
「そういや、なんでこんな簡単なクエストをみんなやりたがらないんだろ？」

「なあ、ダクネス。」

「なんだ？」

「なんで冒険者はこんな簡単なクエストをやらないんだ？」

「それはだな……」

「!!カズマアア!来たわよオオ!!!」

「!?!? な、何がだよ!」

めぐみんなが震えている!?

「カズマ…冬に冒険者がクエストをやらない理由の一つがこれだ」

「冬將軍が来たわよー!!!」

「冬將軍の到来だ!!!」

アクアとダクネスが同時に言った時にそいつは現れた。

———

えっちゃん side

「みんな！冬將軍は寛大よ！DO☆GE☆ZAをすれば許してくれるわ!!」

冬將軍つて。日本の？

「く！おい！あいつを倒すことは出来ないのか！」

「む、無理ですよ！あれは国から高額な討伐報酬が出されている特別指定モンスターですよ！勝てるわけがありません！」

「？アクアとめぐみんば土下座してますが。ダクネスとカズマはなんで土下座しないのでしょうか。」

「ダクネス！カズマ！早く土下座をしなさい！死ぬわよ！」

「誰も見ていなくてもモンスターに頭など下げられん！」

「そんな馬鹿なこと言つてないで早く土下座しろよ！」

！カズマ!!

「カズマ！避けて!!!」

「え?……」

カチンッ!

あの赤い物はなんでしょう。

『黒竜双剋勝利剣!!!!』

「冬將軍を…倒した?」

「二人とも!早くカズマの頭取って!生き返らせるわよ!」

「なに!カズマが生き返るのか!」

はあ。こいつを倒したところでカズマは戻ってこない……

……待っててねカズマ…今から…行くから。

「ちよつと待ったアアアアア!!!!」

ガシツ!

「え?」

「はあはあ。えつちゃん。た、ただいま。」

「カズマ…?いきてるの?」

「おう。」

「本物?」

「もちろん」

「うん。わかってる。この匂いはカズマだから。」

「それはそれで怖いな……」

カズマが苦笑している。でもいいや。カズマが生きてるなら。

「カズマ……よがっだ！よがっだよおおお〜！！」

「ああ……」

ん？なあ、えっちゃん。お前の体若干光ってるぞ。」

「え？」

キラキラキラ！ピカーー！！！！

「「キヤアアア！！」」

「うおおお！！目がああああ！！！！」

これは！霊基再臨！？

「や、やつと光が収まった……えっちゃんの服が変わった……だと」

「な！は、本当です！どうやったのですか！さっきまでの服はどこですか！」

「何それ！新しい宴会芸スキル!? 教えなさいよ！」

「スゴイな！えっちゃん！お前また更に可愛らしくなったぞ！」

「~~ああ~~。かわいいよ。」

「!!!カズマがかわいいって言ってくれた！カズマがかわいいって言ってくれた！」

「はれしい!!!」

「あ、ありがとうございます……」

カズマが死んでしまったことは悲しかったけど。結果的に言えばとても嬉しいな♪

……これからは、何処に行くにもカズマと行動しよう。カズマがまた死んでしまわない

ように……

『やつと。再臨してくれましたか。早く強くなってください。そして、私が手に入れることが出来なかった幸せを貴方が手に入れてください。応援してますよ。』

……ただ、もう少し甘いものをもっとくれると嬉しいです。』

? 誰か喋りましたかね? まあいいですか。

この騒がしいメンバーとこれからもやっていきましよう。

その時カズマは・・・

「……ここはいつたい……?」

『ふむ。思いのほか早かったな』

『ああ、こんなにはやくこつちに来てくれるたあ。兄さんはうれしいねえ』

あ、あんたらは誰だ!?

『私か? わたしは『アルトリア・ペンドラゴン』。貴方達のように言うのであればアーサー王でしょうか』

『お兄さんかい? 俺は『クー・フリーン』だ。あのいけ好かねえアーチャーの野郎が認めた男っていうんだから見に来てみればなかなかいい戦士になりそうな器を持っているじゃねえか。』

アーサー王にクーフリーン!? 歴史にも残るようなすごい有名人かよおおお!!!!
……は! そういえばえつちゃんは?! あの後どうなったんだ!!

『む。そういえばあまりここにはおられぬのだったな。』

『お前のお仲間さんは今現在も冬將軍と戦っているぜ。ま、『謎のヒロインXオルタ』の力を授かったんだ。そう簡単にやられるような雑魚じゃねえだろ。……だが、あいつ

はお前のことを好いているみたいだからな。倒した後はお前を追っかけて死ぬだろうな。』

.....は？

いやいやいや！いまえっちゃんか俺のことを好きって言ったのか!?ありえねえよ!だつてあいつは男だつたんだぞ!?

『精神が体に引つ張られているのだよ。』

エミヤさん!?

『なんだ、アーチャーよ。いたのか。』

『いるなら声をかけろよな。』

『すまないね。たつた今来たところなんだが、面白そうな話をしていたものでついね。』

それで、話の続きなのだが彼女は今現在の前の身体で言う女の部分が強くこの世界で出ているからね。そこから更にあの身体も女だから精神が余計に身体に引つ張られていると言うことだよ。』

何だよそれ...と言うことは俺の知っている未井はもういないと言うことか？

『そう言うわけじゃねえだろ。あの身体に入っているのはあくまでお前の幼馴染なんだろ?』

『別に精神が元男だからと言って身体は女なのだ。そうきにするのは無いのでは?』

・・・そう、だな。

あいつはどんな事があっても俺の幼馴染だ。

『ふ、わかったなら早く行くといい。』

『お前さんの身体はお前さんのお仲間のキャスターの一人が治してあるからな』

『ついでに、私たち全員分の力が入るくらいに器も大きくなっていますからね。これからはもつと宝具などを使用して行くといいでしょう。』

……何言っているのかさっぱりわかんねえけどとりあえずありがとな！

『お気をつけて』

『気をつけろよ』

『気をつけたまえ』

・・・あまりここに来るなと言うことか？

『いいからいきなつて』

『ほら、君の仲間が待っているぞ』

『それではまた今度お会いしましょう。』

ま、いいや。

それじゃ、行くぜ!!

「は！ここは…戻って来たのか。」

！それよりもえっちゃんは！

「カズマ！蘇ったのですね！なら早くえっちゃんを止めてください！」

「あ！自殺をしようと…!!」

「ちよつと待ったアアアアアア!!!」

その時俺は体が勝手に動いていた…

そして、前回に続く…

このアクセルの街に大襲撃を

えっちゃん side

カズマが冬將軍に殺されてからもう3日がたちました。

カズマはアクアからしばらくの間は激しい運動などは禁止と言われており今は家で前の世界のものを作ったり、本を読んだりして過ごしています。

「カズマ。それは何を使っているのですか？」

「これはライターと言って、まあ簡単に言えば魔力を使わないティンダーと思ってくれれば良い。」

これを売ってお金を少しでも稼ごうと思うんだ。」

ティンダーとは、初級魔法の一つで簡単に言うとなんか魔力を使うライターというはつきり言ってライターの劣化版みたいなもので、火を扱わないといけない人間にとってライターはとても便利なものになるので結構な数が売れると思います。

「……それで、えっちゃんはいつもながら何をしているのですか？」

「カズマがまた死なないように護衛兼カズマのライター作りの手伝い」

わたしはカズマの側でずっとライターの容器を作っています。金具部分はわたしで

は作れないのでカズマが作っているのですが、容器はわたしでも作れるほど簡単な作業（理由はカズマが容器の型を作ったのでそれに容器の素材を溶かして流し込んで冷やすだけの簡単な作業）を行なっているというわけです。

冷やすのは自然でも出来ませんが、溶かすのはオルトリアクターを使えば楽に出来るのでは？と考えてやってみたところ、溶かすには溶かせたのですが、火力が強すぎたのか消えてしまい、今は魔法を使つて溶かしています。

職業がバーサーカーなものにもかかわらず魔法を使えるのには驚きました。ただ、火属性と赤い雷みたいなものしか使えませんでしたが。

あと、スキルの中に『狂化』というスキルがあつたのですがこれはバーサーカー専用スキルですよね…取らない方が良さそうです。

「それにしても、えっちゃんは器用ですね。」

「そうだな。その方に流し込む作業もえっちゃんどめぐみんしか出来ないって、逆にあいつらが不器用すぎる気もするがお前は特に器用だよな。昔から。」

「当たり前です。お母さんやお父さん達にも昔から言われてますし、更に裁縫や料理などもやっていたのですからこれぐらい楽勝ですよ。」

「「なんで、男の時からそんな器用なんだよ（ですか）…」」

わかりませんよそんなの。

ただ、神様からは男の時から女の魂もあったからだと言われてますが難しい話はわかりません。

「それより、完成したのが結構な数がありますがどうやって売るんですか？」

「そこは、ウイズに相談して売らせてもらうんだよ。」

「了承してくれたんですか？」

「快く受けてくれたよ。このライター売り上げの約3割をウイズに渡す代わりにおいてもらうことになってる。」

「値段はどうするのですか？」

「一個一万エリスといたところかな。」

「結構安いんですね。」

「高いと思いますけど…買ってくれる人はいるのでしょうか？」

「…買ってくれるだろ。」

心配ですが、カズマの決めたことなんですから最後まで見届けましょう。

カズマ side

「それじゃあ、ウイズのところに行くか！」

俺がそう言うといえっちゃんどめぐみんは立ち上がった。

「ところで、ダクネスとアクアは何処へ行ったのですか？」

「あの二人ならバイトに行ってますよ。」

何故バイト？

「なんでも、自分のツケを払うのにお金もつと必要だからとか。」

「え。あいつまだ借金残ってんの？」

「アクアの事情はわかったのですが、何故ダクネスも一緒なのですか？」

そうめぐみんが言うと、えっちゃんは紙と鉛筆（どこから出した？）そして、そんなものがどこにあった？）を出して何かを書き始めた。

「アクアのバイト内容は寄生虫や、害虫などの駆除。」

ダクネスはドM。

これから繋がることを考えれば。おけ？」

「わかった」

もう考えるのはよそう。

さ、さっさと行くか。

と思ったその時。

『この街にいる冒険者の皆さん!!緊急警報!!緊急警報!!』

早急にギルド前までお集りください!!!』

と言うアナウンスが聞こえた。

「あー!!くそ!なんだよ!ここは初心者の街だろ!緊急警報多すぎだろ!!」

文句は言いながらも三人でギルド前まで行きましたよ。

「それでは、今回の緊急クエストについてお知らせいたします。内容は魔物の大侵攻です。」

数は数えるのも嫌になるくらいの数だと、斥候の方が仰っていたので乱戦になる可能性があります。」

……無限の剣製で、結界の中に閉じ込めて俺が全て殺すでいいかな…

「それで、これだけの人数を集めてどうしようってんだ?」

「はい。みなさんには魔物の侵攻を止めていただきたいのです。」

「止めるだけでいいのによ。」

さつきから主に話してんのはキースやダストなどの冒険者と受付の人が話している

が、俺は加わる気は無い。

んだけど

「なあ、カズマよ。お前も何か案を出してくれねえか？」

やっぱりな。

まあ。俺の考えてたことでも話すとするか。

「その魔物達を一気に倒す方法がある。」

「本当か!!」

「ふっふっふ。やはり、私の爆裂魔法ですわね!?!」

「いや、違う。」

ガクツツ!という効果音が付きそうな見事な反応だったな。

「では、どんな方法ですか?わたしの宝具は単体宝具ですので大勢で来られれば少し不

利になりますよ?」

「その事なんだが、俺も最近新しいスキルを手に入れたからな。それが、対軍用としても

使えそうだからそれを試してみたい。

だが、これは俺も使った事ないから賭けになるがいいか?」

「[[[[.....]]]]」

やはりか。

安定性のある力じゃないから迷うよな。

「良いのでは？他ならぬカズマの意見です。今までハズレは無かったのですから。」

「よっし。バックアップは俺たちに任せな!!」 「時間が掛かるなら私たちで援護するよ

!」「存分にやってくれ!」

「!!みんな…!!」

こうして、俺のスキル初披露がアクセルの街の防衛戦となった。

—————

準備の間は暇である。

俺は今城壁の上に立っているのだが、遠くを千里眼スキルを使ってみると大きな砂煙を舞って何かがこちらへ近づいて来るのがはつきりとわかる。

「おおい!もうすぐそこまで来ているぞ!!」

俺はそう言いながら下へと降りて行った

「全員カズマよりも後ろにいけー!!」

そして、全員が俺の後ろへ行ったことを確認してから俺は集中し始めた。

接敵まであと1分。

えっちゃん side

カズマはみんなが後ろへ下がったのを見てから目を閉じて集中を始めました。

「えっちゃん。」

「なんですか。めぐみん」

「カズマは大丈夫なのでしょうか」

「・・・今は。信じましょう」

わたしとめぐみんの会話が終わると同時に

!!! 魔物たちが来たぞおおー!!!

レンジャーの方がそう叫びました。

するとカズマが。

『体は剣でできている。』

え？・・・今。カズマはなんて・・・

『血潮は鉄で、心は硝子。』

『幾たびの戦場を超え不敗。ただ一度の敗走もなく、

ただ一度の勝利もなし』

間違いない。これは衛宮士郎verの詠唱だ・・・

『担い手はここに独り。剣の丘で鉄を鍛つ

ならば、我が生涯に意味は不要いらず』

「おい!!早くしねえとカズマが殺されるぞ!!」

「もうすぐそこまで来てるよ!!!」

「みんな、静かに
!!!!!!!」

『この体は、

無限の剣で出来ていた』

目を開けるとそこには無数の剣がささっていた。

丘にはカズマ独り。その向こうにはおびただしい量の魔物……

の死体が存在していた。

死体には数えきれない量の剣が刺さっており、見るも無残な死に方をしている。

周りにはわたし以外に人はおらず、おそらくこの光景も一時的、もしくは幻想のようなものだろう。

これをカズマ独りで殺ったのであれば、相当な負荷。もしくはレベルアップによる酔いがくるだろう。

わたしは、いろいろな仮説を立てている間に意識を失った。

もう一度目を開けると、さつきみた魔物の死体とともに先ほどまでたっていた場所にカズマが膝をついていた。

「カズマ!!!大丈夫?!」

わたしは近寄ってみるとカズマは意識を失っていました。

「……これを、カズマがやったてのによ。」

「……あの一瞬でかよ……」

「すげえ」

わたしは、とりあえずカズマを屋敷まで運ぶことにしました。

謎の空間

『ようやく使いましたか。あなたの後継者はだらけすぎなのではないですか?』

『君の後継者が早く使いすぎただけだろう?それに、使うタイミングは人それぞれさ』

『そうですね……』

『ま、何はともあれ。これでわたしたちは少しは楽になったじゃないか。』

『そうですね』

『それと、自分たちの子供を後継者と呼ぶのはわたしとしては不服なのだが?』

『今更でしょう? それにいづれ向こうで会えるのですからその時はおもいつきし甘やかしたらいいじゃないですか。』

『何をそんなに不機嫌なんだい?』

『なんでもありません。』

『……わたしもたまには甘やかしてくださいよ……それよりも、カズマは大丈夫で
しょうか』

『大丈夫だろう。仮にもわたしとお前の子供だぞ?』

『そうですね』……

そういうと、二人は謎の空間から消えて行った

この（カズマとヒロインが）最強のパーティーに祝福を

カズマ side

「それでカズマ。いつからあんな力を手にしたわけ？」

「ええと、それはだな・・・」

あの後俺たちは一度屋敷に戻ったのだが、これのこの力『無限の剣製』アンリミテッドブレイドワークスについて質問攻めを受けていた。

「それは、確か英霊『エミヤ』の宝具でしたよね？なぜそれをもっているのですか？」

「『英霊』？『エミヤ』？」

「ああ、二人は知らないわね。仕方ないから私がおしえと「英霊」というのは過去に歴史残るようなことをした人たち。その人たちが人間から昇華した存在が『英霊』。そして、このわたしの身体もとある英霊の姿と能力をもらった姿」・・・ということよ・・・」

「なるほど・・・アクアどんまい・・・」

「そして、カズマの使った能力の名前は『無限の剣製』アンリミテッドブレイドワークス・・・これも英霊の宝具と呼ばれる各英霊が持ち合わせる能力の一つです。それをなぜカズマが持っているのですか？」

まじか。あの人たちってやつばすごすぎだろ．．．そしてそれを知ってるえっちゃんも．．．

「この力はその『エミヤ』って人に譲り受けたんだよ。」

嘘は言っていない。ただ、あの場にはもう行きたくないがな。

アーサー王にクー・フリーンまでいるなんて聞いていないぞ．．．

「そうですか。」

では、これからは同じ宝具持ちとして一緒に稽古しましょうね？」

「は？」

「おお!!それはいいな!えっちゃんはこの町でも最強と言われるほど強いからカズマにはいい訓練になるだろう。」

「まじで?」

え。いつの間にえっちゃんは最強とまで言われるようになったんですかねえ?

てか、そんなのと訓練とか、俺が死ぬわ!!

「ち、ちなみに現在のレベルは?」

「ちよつと待っててください。．．．68ですね。」

俺の倍はあるじゃねえか!!!

俺のレベルも今回の襲撃で32まで上がったけど足りねえよ!!

「し、死にませんよね?」

「・・・大丈夫です。ちゃんと手加減しますよ・・・宝具のことを秘密にしたのでデュラハンの時よりは本気を出しますが・・・」

「おいちよつとまでええ?!今嫌あな言葉が聞こえたんですけどお!」

「さ、みんな。ギルドに行きましょう。報酬が待っていますよ」

「「おおお!!」」

「待つて!本当に待つて!?!せめて訓練ではやさしくしてえ!」

えつちゃん side



さつきのカズマは面白かったなあ

そういえば。冬將軍の報酬もあるんですよえ。

だとすると、残金どれだけになるんでしょう?まあ、カズマは隠居はしないでしょね。恐らくですがエミヤには魔王を倒せと言われているでしょうし。

まあ、私も倒そうと思いますし魔王軍の幹部なんてわたしとカズマさえいけば余裕で

すしね。

「……これからカズマをどうやって強くしましょうか。確かカズマの持っているスキルは……」

『隠密』『千里眼（鷹の目＋夜目）』『必中（狙撃＋エミヤ）』『連射（エミヤ）』『回避』『闘気』『二刀流』『剣聖』『贗作（創造＋鍛冶＋精製＋エミヤ）』 e t c

でしたよね。

さらに、暗殺者アサシンのスキルもありましたね。

まあ、これならカズマも冬將軍みたいな強敵に合わない限り負けませんね。

「つと。考え事してたらいつの間にかつきましたね」

「さっさと報酬もらってクエストに行こう!!」

「多分これで私たちの貯金もかなりの量になるんじゃない?！」

「私の杖も強化できるかも!!」

「その前に、これらの金は基本俺とえっちゃん（2・8）で稼いだんだから使うときは俺かえっちゃんに言えよ。」

「……」

「おいそこ二人。目を合わせろ」

ふふ。やっぱりこのパーティーは楽しいですね。

この平和がいつまでも続けばいいのに・・・

この機動要塞の調査(?)に祝福を えつちゃんside

えつちゃんside

「機動要塞?」

「そう。その機動要塞と言う怪物がこの街に接近しているようなんだ。」

今機動要塞?とやらの話を教えてくれたのはミヤギ?ミツラギ?「ミツルギな?」そうそうそのミツルギというイケメン(笑)が教えてくれました。

あ、ミツルギと最初に出会ったのはわたしとカズマ、そしてアクアの三人で買い物をしている時でした。

く回想く

「えつちゃん。何買うのよ?」

「鉄ですよ」

「鉄うう?そんなもの買って何に使うのよ。」

「俺のライター作りの素材に使うんだよ。」

「ライター??」

「そう。まあ、安定した収入を得るためにな。」

「ふーん。それじゃ、さっさと行ってお酒を飲みに行きましょう!!」

「ああああー!!」

「「??」」

「め、女神様?!?!なぜこんなところに!?!」

「女神?!」

「ちよつと!!私のごとに決まっているじゃない!!」

「そんなことよりも何故こんなところにいるのですか?!」

「まずお前の名前を名乗れよ」

そうですね。先ほどから自分の要求を押し付けるようにしゃべってきますが……うつとおしい。ふきとばしましょうか?せっかく最初はカズマと二人で来る予定だったのをアクアに邪魔されていらついているのにさらにいらつきますね

「そうだったね。僕の名前は御剣響夜。アクア様に転生してもらっていまでは勇者をしている」

wwwwwwwwww

勇者(笑)

わたしとカズマよりはるかに弱いくせに勇者(笑)とかwwwうけるwww
(その時のカズマ)

・・・とか思っているんだろぅなあゝゝ。

こいつ普段無表情でほかの人からすれば何考えているのかわからないんだろぅけど俺からすれば昔と変わんねえなあゝ。

てか、こいつそんなに弱いのか?ちよつと聞いてみたいんだけど・・・

『なあえっちゃん。こいつそんなに弱いのか?』

『!?わたしの考えていたことが分かつたんですか?』

『後半だけな?それよりどれだけ弱いんだ?こいつ』

『ホツまず。耐久に関してはおそらく自身があるんでしょう。事実ダクネスよりは少し劣るでしょうがそれなりにあります。ですが、今まで恐らくあの転生特典である『魔剣グラム』に頼り切っていたんでしょう。戦闘経験が全くなくゴリ押し、もしくはあの魔剣の能力を使用して勝ってきたのでしょうか。戦法などは全然ないと見ました。』
『なるほどな』

「なんだって!?!」

ん？話が終わったんでしょ．．．!?
いきなりカズマの胸元をつかみました。

．．．．殺す．．．

そう思ったときカズマが

「何が許せないんだ？」

「君が女神様を転生特典に選んでこの世界に下したことがだ!!」

「別にいいだろ『もの』なんだから」

「．．．．いいだろう。なら勝負しろ。僕が勝ったらアクア様をもらっていく。君が勝つたら「お前の全財産」．．．い、いいだろう。だが、ちゃんと約束を守ってもらうぞ!!」

「いいよ。ほらどつからでもかかってこいよ」

「く、なめるなあ!!!」

「ひよい。つとストンつと。」

「う!!」

ボタン．．．．

．．．．．よわ

「え？弱すぎだろこいつ．．．」

「まあ、いいじゃない。さ、鉄を買いに行くんでしょ？さっさといきましょ」

・・・イタズラしますか。

「えっちゃん。あまりひどいことはすんなよ?」

わかってますって。

自分の愚かさを痛感してもらっただけなので。

く回想終了く

ということがありました。

「それで。そのデストロイヤーってのが、俺たちにどう関係があるんだ?」

「それは・・・君たちに調査をお願いしたいんだ・・・」

・・・どうしますか?

「・・・はあ。わかった。一応いつてやる。ただし、それ相応の報酬は期待しているぞ」

「!・ありがとう!!」

はあ。カズマは甘いんですから・・・

・・・ごめんって。・・・わかりましたよ。もう・・・

この機動要塞の調査（？）に祝福を カズマ side

「えっちゃん。あとのくらのいのところまで目標地点に到達するんだ？」

「そうですね。このペースですとあと5日ほどでしょうか」

俺たちが『機動要塞デストロイヤー』の調査依頼を受けてからもう3日たつ。

俺たちが調査に行くといった時のあいつらはちよつとおもしろかったな。

く回想く

『ええ!!デストロイヤーの調査にいくう!!だめです!!あれはだめです!』

『何がダメなんだ?』

『デストロイヤーとは昔の魔法大国が作り出した兵器なんだが、今はそれが暴走してな。デストロイヤーが通った後は草木も残らないらしい。』

『やめましょう!?!あれは爆裂魔法でも何発か打たないと勝てない存在なんですよ!?!』

『今回は調査です。この町に近づいているという情報があつたのでそれが本当なのか。可能なら撃退、もしくは破壊が目的というだけです。』

『『えっちゃんは破壊する気でしょう(だろう)!!?』』

『ま、すぐ帰ってくる。じゃな』

『あ、まってくd』

く回想終了く

「かなりでかいんだよな」

「そうらしいです。」

「なら、あれか」

「はい。恐らくあれかと思えます」

「んじゃ。攻撃してみるか。さき俺がやるか?」

「わたしからやります」

『オルトリアクター 臨界突破。』

我が暗黒の光芒で素粒子に還れ!!!

黒龍クロス双剋カカリ勝利バ劍リ!!!
』

ピシイイイ!!!

「お!! 結界にひびが入ったな。」

よしおれもやるか!!」

「頑張ってください」

『思い浮かべるのは常に勝利する自分の姿』

『身体は剣で出来ている。』

血潮は鉄で、心は硝子

幾たびの戦場を超え不敗。

ただ一度の敗走もなく、

ただ一度の勝利もなし。

担い手はここに独り。

剣の丘で鉄を打つ

ならば、その生涯に意味はいらす。

『この身体は無限の剣で出来ていた!!』

『パリイイイン!!!!』

『ざ!!ざざざざざざ!!ガキイイン!!』

「よっしやああ!!!」

「やったー」

結界の破壊完了!!

次は・・・

『警報発令!!緊急停止を起こしたためこの機体は緊急時の自爆を行うこととなりました!!搭乗員の方は速やかに脱出をお願いします。』

その後、繰り返しますとって同じ内容が流れた。

「なあえっちゃん。」

「なんですか。」

「宝具でなんとかならないのか?」

「さあ?」

俺たちはとても冷静だった。

『無限の剣製』の中に避難するか。どうせここなら周囲に村や町もないし。爆発してもいいだろう」

「そうですね。」

「んじゃ。いこうか」

シュン!!

その日。大きな爆発音とともに機動要塞デストロイヤーは消えた。その時デストロイヤーのいた場所から半径860mの草木が燃えて消え失せたという・・・

この領主に肅正を 1

『無限の剣製』の中では。

「なあえっちゃん。もうそろそろ行くか？」

「……まだいいでしょうもう少しだけこのままでいさせてください。」

カズマとえっちゃんが密着（カズマの膝をえっちゃんが枕にしている構図）していた。……爆発してしまえ……

「いや、もうかれこれ2時間もこの状態だと足が痺れてくるんだ……だからどいてくれると助かるんだが……」

「……仕方ありませんね。分かりました。どきますよ」

そう言いつつ渋々、名残惜しそうにどいたえっちゃん。

……さてと。俺たちがいない間の地上はどうなっているのかなつと。

・・・出たら辺り一面焼け野原でした

えつちゃん side

カズマの膝枕は名残惜しいですがそれよりもこれはどういうことなのでしょう？

こんなにも森がきれいに消し飛ぶなんてどんな威力だったんでしょうか？まあ、わたしとカズマの二人（英霊クラス）で勝てるんですからアクアたちでも倒せたかもしれないね。

「そういえばカズマ。レベルは上がりましたか？」

「あ、ああ。30から43まで上がったけど。こんなことになるなんてな。」

ふむ。それならあとは適当にクエストをやってレベルを上げればいいですね。

「そうですか。では、早く帰りましょう。今日は高いものを食べませんか？わたしはカニとかいいと思うんですよね。カズマはどうですか？」

「ああ。そうだな。早く帰っていつもよりも豪華なのを食べるとしようか。」

「そうしましょう。」

……あ、そういえば。カズマはこの戦闘服バトルドレスが最初に来ていた制服。どちらがいいですか？

いや。おまえその服になったときなぜか粒子になって消えて行ったじゃん。いつでもかえられるんですよ？

え？

こんな風に。

えええ……

セイントグラフとって、いつでも替えれる衣装です。

なら制服かな。

わかりました……

といった感じで話しながら二人は町に帰っていききました。

二人が帰ってきたときにはアクセルの町は大混乱でした。

「あの。どうかしたんですか？」

「は?! あんたたち知らないのか!? 数日前に森のほうから大きな爆発音がして調査隊が見に行ったら森の大部分が消えていたんだぞ?! それで、デストロイヤー並みの破壊力を持つている化け物がいて、この町に迫ってきているのかもしれないって噂でもちきりなんだぞ?!」

・・・はい。それ完全に私たちですね。こんなところまで響いていたんですね・・・

「そ、そうなんですか。それでは俺たちギルドに用があるので失礼します・・・」

「あんたらもようじんしておけよ!!」

カズマは終始苦笑いでしたね。

「これからどうするんです? ギルドに行つて報告するだけで終わりますかね?」

「これから考えよう・・・」

ギルドに行くのが少し面倒になりました。

カズマ side

えっちゃんがるさといつた連中から金全部巻きあげて甘味を買っていた件について・・さらに財布の中身がなくなつて叫んだら追加を受注された奴らがあまりにもか
わいそうだったんであとでデストロイヤーの報酬でもわけてやろう。

それよりも今俺とえっちゃんはとでもピンチである。

なぜかつて？それはな。

「冒険者カズマ！および謎のヒロインXオルタ！二人には町を混乱状態にし、さらに森を一部破壊した罪により逮捕するよう今朝領主より通達があつた!!おとなしくついてきてもらおう！なお、何か言いたいのであれば他の奴らも今言うがいい!!同じように牢に入りたくないのならばな!!」

といつていきなり俺たちを捕縛しようとしている騎士さんがいるからだ。

なんでこうなつたんだろう。

「なあ、なんで俺たちが逮捕されなきゃなんねえんだ？俺たちはデストロイヤーを倒しただけだぜ？逮捕されるよりも感謝されるようなことをしたつもりなんだがな？」

「それは最初に述べたとおりに町のみんなに誤解されるようなことをしたからだ。それに倒したというならなぜそんなきれいな格好をしている。あんな大爆発が起きたなら

それなりに傷ついていてもおかしくないだろう。」

「それは俺の固有結界の中に入って爆発をしのいだからに決まっているだろう。」

「貴様の職業はアーチャーだと聞いている。貴様にそんな芸当ができると思えん！」

「俺は特別なんでね」

「貴様！ふざけるのも大概に・・・！」

騎士が何か言う前にえつちゃんやんが俺たちの間に入って騎士にネックロカリバーを突き立てた。

「ふざけてんのはどっちですか。こっちは町を助けてやったんです。そんなことを言われる筋合いはありません。とっとと帰ってください。」

「・・・！必ず捕まえる！後悔しているがいい！！」

「あ、報酬忘れんなよー！ってもういないし。」

「「おおおおおー！！！！」」

「すげえぜ二人とも！頑固な騎士を追い払うなんて！」

「この町の領主は嫌いです」

「よっしやあ！宴だあ！」

「「「うおおおおおー！！！！」」」

はあ、報酬はなしかねえ。

てかこいつら金あんのかよ・・・

ちなみにこのときアクアたちは家で寝てました。

この領主に肅清を！3

カズマ side

あれはそう。よく晴れた昼下がりのことだった。

「はあああああああ!!???!!
えっちゃんが捕まったああ!!」

「ああ。大体二時間くらい前だったかな。衛兵たちがいきなりやってきて国を守る兵士に手を出したのだの、魔王軍のスパイだのと好きかって言って連れて行きやがった。」

「そんなときえっちゃんは抵抗しなかったのか?」

「しなかったな。なんか、みんなに迷惑をかけたくないだの言っていたな。」

「っち！確かにあいつなら俺たちの迷惑をかけるようなことをしないはず。どうにかできないものか・・・」

「あ、そうそう。カズマ！えっちゃんがカズマが来たならこれを渡してほしいって。渡せばどう使うかわかるっていつていたが。これはいったいどこの国の文字だ？全く読め

「だからあいつの悪事が世の中で広まらないのか!」

「あいつとことん屑野郎だな!!」

「……この町の領主は随分と嫌われているんだな。まあ俺もいいイメージはないが。これならとことんやれるな……クッククッククック……」

(クズマ発動するのか?これは見ものだな。)

えっちゃん side

月明かりが差し込む牢屋の中には一人の少女がいた。そして、その牢の鉄格子の前にはぶくぶくと太った裕福そうな身なりに身を包みこんだ男が立っていた。

「ふっふっふ。前々から貴様をわしの手で傷物にしてやりたかったんじや。今回はわしに従ってもらうぞ。ま、お仲間さんがどうしてもよいのであれば抵抗してくれても構わんがな。はっはっはっはっは!」

そういつてデブが私のいる牢屋の前から姿を消していききました。

……はあ。自分は悪魔の力があるから絶対平気みたいな考えで動いているんでしょ

うけどはつきり言つてカズマだけでもあの悪魔を倒せてしまいそうな雰囲気ですし、私
がここで暴れると余計にカズマたちに迷惑をかけてしまいそうだからおとなしくして
いると考えずにべらべらと『じぶんがかんがえたさいこうのけいかく』みたいなお子様
な計画を語つてくれましたし、はつきり言つてバカとしか言いようがありませんね。

「はあ、さつさと終わらせて早く助けてくださいよ。カズマ。」

月明かりに照らされながらえつちゃんはそのつぶやいた。

この領主に肅清を4

カズマ side

今回はさすがにアクアを連れて行かないといけないな。勝手な想像だが悪魔相手なら女神を連れて行くべきだろう。

というわけで着いたのは勝手知ったる我がマイホーム!!

「アークアー!!どこだあー!!」

「……ここよおお!!」

「……なぜおれの部屋から……?」

俺の部屋からアクアの声が聞こえてきたから向かってみると。そこは今朝まで俺が使ってたと思えないほどに散らかっていた。具体的にいうとまずめぐみん。二日酔いにあつたかのようにぐったりしている。昨日は飲んでいなかったので恐らくこの数時間何かあつたのだろう。次にダクネス。こいつもぐったりしている。ということは元凶は起きているこいつしかない。

「……おいアクア。弁明があるなら聞いてやらんこともないが？」

「?何をそんなに怒っているのよ」

「……朝つぱらから何こんなに飲んでいやがんだあああ!!!」

こいつ。俺がえつちゃんから隠していた秘蔵の酒すらもあけていやがった!!!

※えつちゃん酒が飲めないぞ!以前度数が限りなく低いリキュールを飲んだ時ぶっ倒れたらしい。

『ちなみにわたしはカズマが隠している酒のことは知っていますよ?』

・っは!何かえつちゃんから重要なことを聞かされたような気がするが気のせいだろう。

それよりもこいつの処遇をどうするか・っは!これだ!!

「おいアクア。今回のことを不問にするかわりにお前。悪魔退治手伝え」

「はあ!?!なんでわたしがそんなk「ん?なんか言ったか?」・・・何でもありません。」

ちなみに今のアクアの態勢は絨毯の敷いていないつるつるの床の上に正座をしてそのうえ体は縛られて足の上には石板を置いてあるぞ!

「それよりもカズマ。えっちゃんはどうしたのですか?」

「領主の野郎につかまった」

「何!?!」

「それプラスその領主が悪魔を使役してるんだとさ」

「そういうことか!だからあいつの悪事は全部公に出ることがなかったのか・・・!」

「その話は今はいい。それよりもえっちゃんを助けてついでに悪魔を倒すことが今回冒険者組合全体に出された依頼内容だ。」

「・・・カズマさんなら自分で悪魔の一人や二人倒せると思うんですけど?」

「そんな武器今は出せるかってんだ」

「まあいいさつさとえっちゃんを助けに行くぞカズマ!」

「まあまあ。あいつがすぐにどうなるわけじゃないんだ。まず作戦の決行は夜になつてから。それまで各自で準備をしてる。あとアクア。逃げんなよ?逃げたらお前の借金

総額800万エリス自分で返済してもらおうからな。」

「や、やだなあ、カズマさん。私が逃げるわけじゃないじゃない」

こいつ・・・!はあ。

・・・まつてろよえつちゃん。今から助けに行くからな・・・!

くそのころのえつちゃんく

「おなかへりました」

「さつき食べたばかりだろ・・・!」

「足りません。甘味ください。さあ、早く!」

「ひ!!わ、分かったから静かにしててくれ!!」

どこまでもマイペースは崩さない!さすがえつちゃんだぜ!

この領主に肅清を5

カズマ side

あれから俺はどうかこうにかして戦力(この町の冒険者全員+α)を集めた。どうしてかわからんが冒険者じゃないのに肉屋のおじさんだったりバイトの時にお世話になった親方たちも来ようとしていた。

ここの領主って本当に嫌われてんだな・・・

まあそれはさておき、えつちゃんのことを考えよう。

あれを好きにできる奴はまずいない・・・はず。

・・・大丈夫・・・だよな。

えつちゃん side

「あの、ほんとすみません。ですからもう食べないでください。お願いします。もうこの館にある甘味と言う甘味は全て出し尽くしたので本当にすみませんがもうやめてください。(以下同じ文章が淡々と続いている)」

あのあと牢屋の鉄格子を破壊して屋敷を探索している間に甘い匂いがしたので厨房らしき場所に来てみれば美味しそうなケーキなどがあつたので、食べてる最中です。

「そうですね。日本の四字熟語にも『腹八分目』とありますからね。ここら辺にしておきましょう。」

「…この屋敷の甘味を食べ尽くしているのに腹八分目なのか…」

「何か言いました?」

「滅相もございませぬ!」

現在この屋敷にいる人間(?)はこの街の領主とその領主のところにいた悪魔だけらしいです。まあ、はつきり言つて悪魔ごときなら魔王軍よりも弱いと思います。だから、油断してても簡単に倒せました。

「カズマが来るまでは大人しくしておきますが、カズマが来たらあなた達も終わりです

ね。」

「は、はいはい。」

(暇だなあ)

カズマ side

「さてと。おいお前らー!!! 準備はできてるかー!!!」

「「「「おおおーおーおーおー!!!」」」」

「今からあのクソ領主ぶつ飛ばしに行くぞ!!!」

「「「おおー!!!」」」あの野郎は一発は殴らねえと気が済まねえからな!!!」あいつのせいで税金が払えなかった時が何度あったか…!!!」さつさとぶつ飛ばしに行くぞ!!!」

「みんなやる気のようにすねカズマ。」

「ああ。どうやらこの領主は領民からとてつもないほどの恨みを向けられているみたいだな。まあ、聞いている限りだと領主の自業自得なんだけどな。」

俺がそう答えると納得といった表情でうなずくめぐみんとその隣にいたダクネスが俺に訪ねてきた。

「ああそれなんだが、今までなぜかあいつの悪事が表に出ることは一度もなかったがカズマたちの言っていることが本当ならアルダーブがしたがえている悪魔は相当強力なものだぞ。」

「構わねえよ。たとえ強くてもえっちゃんは何もやっていないわけないだろ？ある程度弱ってる前提で戦うさ」

「そうだが・・・」

この領主に肅清を6

えっちゃんSIDE

外から聞こえてくる声から察するにとうとう今日この屋敷に突撃するみたいですね。カズマにしては時間がかかりすぎではないですかね？

まあこれからこの家の人間とあの悪魔に起こることに関しては何も責任を負いませんがね。

それじゃさっさとここから出るとしますかね。ついでにお金になりそうなものをいくつか拝借しますか……ってあの後ろ姿は……

「おおーい。あなたクリスさんではないですか？」

「!!あ、あなたはカズマとアクア様の所の……」

「えっちゃんと申します。ところであなたはここで何を？」

「それはこちらのセリフなのだけれど……まあいいわ。

ここに来た理由はふたつ、ひとつはこの屋敷のお宝を奪おうかと思ってるね。」

それはまるつきり泥棒では?というツツコミ待ちなのでしょうか?

「もうひとつはこの屋敷から少しだけ悪魔の気配を感じたからよ」

「ああ、それに関しては確かにいますよ」

「!?やっぱりね……あとは聖水をどれだけ買えるか……」

「まあカズマ達はその悪魔についての対処などを今考えてここに突撃する準備を整えているところでしょうし……クリスさんはご存知ないのです?」

「ええ!?そうだったの!」

「はい」

「orzならわたしもその準備手伝えよかったわ」

そう言ってももう外にカズマたち来てますので関係ないのですがね

「外をご覧になっては?」

「へ?外?………つて何これ!?この街の冒険者が勢ぞろいしてるじゃない!」

「はい。なのでわたしも潜入を終えて脱出しようかなと思つて」

「そうだったのね………つて潜入なんてそんな危険なことやってたの!?悪魔に操られてるんじゃないの!」

「あんな雑魚に操られるほど弱くありませんよ」

「あ、悪魔を雑魚って……（・ω・）」

「とりあえず脱出しませんか？ 話はその後で」

「わ、分かった早く行きましょう」

その後、集結した冒険者達が協力し合いわたしが送った悪魔の能力についても完全に攻略し最後はアクアの魔法で終わらせました。まあ、はつきり言ってわたしがあれだけ弱らせたのですからこれぐらいはやってもらわないも行けませんかね……

（後日談）

カズマ side

「えっちゃん！ なんで1人で潜入なんて危険なことをしたのですかあ!!」

「そうよ、私たちになんの相談もなしなんて水臭いじゃない!」

「今後こんな危ないことをする前に私たちに一言でもいいから声をかけてくれ」

珍しいなこいつらがこんなまともなことを言うなんて……

「そうすればあんのクズの家から色々盗む計画が立てれたじゃない!!」

訂正、駄女神はとことん落ちてるみたいだな。

まあ、

「そうだぞ、こんなにみんな心配するぐらいのことを勝手にしたんだこれからは報告連絡相談のほう・れん・そうを大事にしろよ?」

「分かりました。これからは」一言言ってから行動することにします」

??なんか含みあるセリフ……嫌な予感がするぞ??

「という訳で明日からちよつと温泉旅行に行きませんか?」

ピラツと見せられたのは温泉街のチラシと温泉旅館の無料宿泊チケットだった。

って

「「ええええええええ
!!!!????」」

こいつの突拍子もない行動は女になってからさらに酷くなってるんだが……!?